

彷徨

21

西高ワンダーフォーゲル部

1989年7月

目 次

山 行 総 覧	1
山 行 報 告	8
69・9 9月沢登り 勘七沢	8
69・10 10月山行 飛龍～雲取山	9
70・4 新入生歓迎会 川苔山	10
70・6 6月山行 小金沢連嶺	12
70・7 夏山合宿	13
70・9 9月山行 丹沢沢登り	15
71・2 2月山行 那須・茶臼岳	16
71・3 春山台宿 仙丈岳アタック	17
71・7 夏山合宿 南ア南部縦走	19
71・9 谷川岳 個人山行	21
72・1 1月山行 雪上訓練	22
72・3 3月雪上訓練 那須岳	23
72・3 春山合宿 八ヶ岳縦走	24
72・5 雪上訓練 幽ノ沢	25
72・6 6月A山行 三頭山	26
72・6 6月B山行 大菩薩峠	27
72・7 夏山合宿 北アルプス南部	28
72・9 9月山行 沢登り	30
72・10 10月個人山行 甲武信岳～雁坂峠	31
72・11 11月山行 八ヶ岳 硫黄岳	32
72・12 スキー合宿 岩 岳	33

73・1	1月山行	雲取山	34
73・5	雪上訓練	谷川岳 幽ノ沢	36
73・6	6月個人山行	東丹沢主陵	37
73.5	5月山行	鷹ノ巣山～雲取山	37
73.8	個人山行	南ア・北岳～塩見峠	38
73.9	個人山行	金峰山・国師岳	39
73.9	個人山行	丹沢・水無川本谷	40
73.11	11月山行	丹沢	41
会 員 名 簿				43
編 集 後 記				49

山 行 総 覧 (6 9 ~ 7 3) 男 子

6 9 年 度

9 / 2 0 ~ 2 1 丹 沢 勘 七 沢

参加者 ; C L 荒木仁夫、S L 吉田、西井 (2 年)、荒木達郎、石川、今井、松田 (1 年)、
女子 C L 甲斐、田辺 (2 年) 広兼、渡辺 (1 年)、O B、小川、梅原、三浦潤、八島、岩井
氏、女子は源次郎沢

1 0 / 1 8 ~ 1 9 飛 龍 ~ 雲 取

参加者 ; C L 荒木、S L 吉田、西井 (2 年)、荒木、石川、今井、倉重、松田 (1 年)、O B
梅原氏

1 1 / 2 ~ 3 八ヶ岳主脈

参加者 ; C L 荒木、S L 吉田、西井 (2 年)、荒木、今井、倉重、松田 (1 年)、O B 山野氏

1 2 / 2 5 ~ 3 1 スキ一合宿・樽池高原

参加者 ; C L 荒木、S L 吉田、西井、(2 年)、荒木、石川、今井、倉重、松田 (1 年)

女子 甲斐、東郷、田辺 (2 年)、O B、梅原、三浦等、三浦潤氏 他数名

7 0 / 1 / 2 4 ~ 2 5 大菩薩

参加者 ; C L 荒木、S L 吉田、西井 (2 年)、荒木、今井、倉重、O B、尾崎氏

2 / 2 1 ~ 2 2 那須茶臼岳

参加者 ; C L 荒木、S L 吉田、西井 (2 年)、荒木、石川、松田 (1 年)、O B 三浦潤氏

3 / 2 2 ~ 2 6 早川尾根

参加者 ; C L 荒木、S L 吉田、西井 (2 年)、荒木、石川、倉重、松田、O B 山野氏

7 0 年 度

4 / 2 6 新入生歓迎会 川苔山

参加者 ; C L 荒木、S L 荒木、(3 年) 西井、吉田、(2 年) 倉重、石川、松田、女子 3 年
甲斐、田辺、東郷、(2 年) 風巻、渡辺、1 年男子 5 名、1 年女子 3 名、小田先生、その他
O B、O G

5 / 9 ~ 1 0 笹尾根

参加者 ; C L 荒木、S L 倉重、吉田 (3 年)、荒木、石川、松田 (2 年)、森下、大友、中
村、千賀、加藤、王浦、木口、橋谷 (1 年)、O B 小川氏

6 / 2 0 ~ 2 1 小金沢連嶺

参加者 ; C L 荒木、S L 倉重、西井 (3 年)、荒木、石川 (2 年)、久米、酒井、玉浦、大

友、渡辺、森下、木口、大谷、加藤、千賀、橋谷（1年）、OB小川氏

7/23～30 後立山連峰縦走

参加者；CL荒木、SL倉重、吉田、西井（3年）、荒木、石川（2年）、加藤、酒井、久米、大谷、千賀、玉浦、森下（1年）、OB小川氏、水口氏

9/19～20 丹沢・沢登り

参加者；1. 水無川本谷隊、CL吉田、SL石川、西井（3年）、久米、酒井、千賀、宮武（1年）、2. 新芽、沢隊、CL荒木、SL倉重、玉浦、大谷、森下、加藤（1年）、OB小川氏

10月 春山偵察 仙丈岳

参加者 CL倉重、SL石川

10/31～11/1 雲取山

参加者；CL倉重、SL石川、久米、森下、玉浦、酒井、加藤、千賀、橋谷

11/14～15 個人山行 雁坂嶺

参加者；CL倉重、SL松田、森下、大谷、深見、久米、鈴木（1年）

11/21～23 金峰山～甲武信岳

参加者；CL倉重、SL石川、松田（2年）、森下、久米、酒井、深見、鈴木、加藤、千賀、玉浦（1年）、OB山野氏

12/26～30 スキー合宿 谷川天神平

参加者；CL倉重、SL石川、松田（2年）、久米、森下、酒井、玉浦、橋谷、鈴木、深見、大谷、以上男子。渡辺（2年）、山田、山成、内藤、住山（1年）、以上女子。OB梅原氏、尾崎氏、秋山氏、永井（兄）氏、OG山田さん

1/30～31 丹沢主脈縦走

参加者；CL倉重、SL石川、松田（年）、久米、森下、玉浦、鈴木、深見、酒井（1年）、OB山野氏

2/20～21 那須

参加者；CL倉重、SL石川、松田（2年）、久米、森下、酒井（1年）、OB上遠野氏

3/22～26 春山合宿 仙丈岳

参加者；CL倉重、SL石川、松田（2年）、久米、森下、酒井（1年）、OB岡田氏、伊東氏

71年度

4/25 新入生歓迎会 鷹ノ巣山

参加者；CL倉重、SL久米、3年3名、2年7名、1年男子7名、女子5名、吉野先生、篠崎先生

4/29 雪上訓練 谷川岳幽ノ沢

参加者；CL倉重、石川、松田（3年）、森下、酒井、鈴木（2年）、OB目沢、梶内、伊東、中村、依田氏

5/8～9 個人山行 飛龍～雁坂峠

参加者；CL松田、SL久米、鈴木、森下

6/5～6 雲取山

参加者；CL倉重、SL久米、石川（3年）、鈴木、森下、酒井（2年）、遠藤、鐘江、角田、戸倉、戸嶋、広瀬、山口、米倉（1年）

6/19～20 小金沢連嶺

参加者；CL倉重、SL森下、石川、松田（3年）、鈴木（2年）、遠藤、鐘江、角田、戸倉、戸嶋、広瀬、米倉、山口（1年）

7/21～29 南ア 塩見～聖縦走

参加者；CL倉重、SL森下、石川、松田（3年）、遠藤、鐘江、戸倉、角田、広瀬、米倉（1年）、OB山野氏

8/15～17 鳳凰三山（公式山行）

参加者；CL久米、SL森下、2年4名 1年1名、間野先生

9/15 個人山行 谷川岳

参加者；CL森下、鈴木（2年）、遠藤、角田、戸嶋、米倉

9/15～26 鷹ノ巣沢

参加者；CL倉重、SL森下、石川、松田（3年）、鈴木（2年）、遠藤、大谷、鐘江、角田、戸倉、戸嶋、馬場、広瀬、米倉（1年）、OB伊東、中村、渡辺氏

11/7 春山偵察 八ヶ岳（硫黄～横岳～赤岳）

参加者；CL森下、鈴木（2年）、米倉（1年）

11/20～21 雲取山

参加者；CL森下、SL鈴木（2年）、遠藤、大谷、鐘江、角田、戸倉、戸嶋、中尾、馬場、広瀬、米倉（1年）

12/25～31 スキ一合宿 谷川天神平

参加者；CL森下、鈴木（2年）、遠藤、鐘江、角田、戸倉、戸嶋、中尾、広瀬、米倉（1年）
女子：山田、山成（2年）、大和田（1年） OB水口、山本、山田、三浦等氏

72/1/29~30 丹沢主脈縦走

参加者；CL森下、SL鈴木（2年）、遠藤、角田、戸倉、中尾、米倉（1年）、OB山野氏

3/12 那須朝日岳

参加者；CL森下、SL鈴木（2年）、遠藤、角田、戸倉、中尾（1年）、OB山野氏

3/25~30 八ヶ岳（赤岳、硫黄岳）

参加者；CL森下、SL鈴木（2年）、遠藤、角田、戸倉、中尾（1年）、OB中村氏

72年度

4/29 新入生歓迎会 鷹ノ巣山

参加者；CL森下、SL遠藤、3年4名、2年7名、1年男子2名、女子3名、吉野先生、中村先生、水野先生、他OB多数

5/5 雪上訓練 谷川岳幽ノ沢

参加者；CL遠藤、広瀬、米倉（2年）、OB梶内、山野氏

6/10~11 笹尾根

参加者；CL森下、SL遠藤彰、鐘江、角田、戸倉、中尾、広瀬、米倉（2年）、伊東、遠藤信行、副島、水森（1年）

6/24~25 小金沢連嶺

参加者；CL鈴木、SL遠藤、角田、中尾、戸倉、広瀬（2年）、伊東、遠藤、副島、水森（1年）

7/24~30 北ア 薬師～槍～南岳

参加者；CL遠藤、SL米倉、鐘江、角田、戸倉、中尾、広瀬（2年）、伊東、遠藤、副島、水森（1年）、OB山野氏

8/16~18 尾瀬（公式山行）

参加者；CL遠藤、SL戸倉、鐘江、角田、中尾、広瀬、2年男子2名、菅野先生、中込先生

9/22~23 巻機山割引沢

参加者；CL遠藤、SL戸倉、鐘江、角田、中尾、広瀬（2年）、伊東、遠藤、副島、水森（1年）、OB山野、伊東、渡辺、西井、依田氏

10/1~2 個人山行 甲武信～雁坂峠

参加者；CL遠藤、SL伊東、遠藤、副島

11/12 春山偵察、八ヶ岳北部

参加者；CL遠藤、戸倉、鐘江、中尾、広瀬

11/19 八ヶ岳（硫黄岳）

12/25～29 スキー合宿（岩岳スキー場）

参加者；CL遠藤、SL戸倉、鐘江、角田、中尾（2年）、伊東（1年）、OB永井、水口、山本、吉田氏

72/1/20～21 雲取山

参加者；CL遠藤、SL戸倉、中尾、広瀬（2年）、遠藤（1年）、OB西井氏

3/23 那須（峰の茶屋）

参加者；CL遠藤、SL戸倉、中尾（2年）、伊東、遠藤（1年）、OB吉田氏

3/26～31 八ヶ岳主脈縦走

参加者；CL遠藤、SL戸倉、中尾、広瀬（2年）、伊東、遠藤（1年）、OB渡辺氏

ワンダーフォーゲル部女子 46年度～48年度の行動記録

日 時	目的地	C L	参加メンバー
46. 4. 25	歓迎会 たかのす山		住山、山田、山成、内藤(2)、斉藤、石井、大和田、 前川、原田(1)
5. 9	高水三山	住山	住山、山田、山成
6. 6	大岳山	住山	雨で中止
6. 19～20	鍋割山	住山 SL山成	住山、山成、内藤(2)、斉藤、石井、大和田(1) OG山田、渡辺(3)
7. 21～29	白馬岳 (朝日岳)	住山 SL山成	住山、山成(2)、斉藤、石井、大和田(1)
夏山合宿	一泊一朝日岳		OG山田、岩崎、OB三浦潤
9. 18～19	雲取山	住山 SL山成	住山、山成、内藤(2)、石井、斉藤、大和田(1)
11. 14	三頭山	住山 SL山成	住山、山田、山成、内藤(2)、大和田(1)
12. 25～30	スキー		住山、山田(2)、大和田(1)、OG山田
47. 2. 20	御前山	住山 SL大和田	住山、山成(2)、大和田(1)、依田 (OG)
47. 4.	歓迎会 たかのす山		住山、山成、山田、内藤(3)、大和田(2) 雲井、木村、小暮、島田、青山(1)
6.	丹沢表尾根	大和田	事情があって中止 活動中止
48. 4.	歓迎会 たかのす山		大和田(3)、森田(2)
6.	鷹ノ巣山	大和田	大和田(3)、森田、湯浅、入江(2) 山田 (OG)、山野 (OB)
7. 22	丹沢表尾根	大和田	大和田(3)、森田(2)、3年男子3人
8. 2～7	朝日連峰縦走 夏山合宿	大和田	大和田(3)、森田(2) OG住山、依田、OB山野
10.		森田	
11.		森田	
49. 1. 20	三頭山	森田	森田、? 九鬼(1)

3年間の私の感想

私にとって、ワングルの満足な活動ができたのは、1年生のときだけで、「山っていいなー」と山のすばらしさに触れることができた時、もう私は1人でした。本当の事を言えば、私は、石井さんや齊藤さんとは、いっしょにやっていくことはできなかつたろうし、また、はっきり言って、いっしょにやっていく気もなかつたので、2人がやめた時は、なんとなく、せいせいした感じさえしていたのです。（これは、彼女たちと私とが全く相容れない人間だからです。こういうことってよくあることですよね。）そして1人でも絶対にやっていけると思っていました。山が好きでありさえすれば、1人ぼっちでも関係ないと思ったのです。そういった私に、充実した日々が流れて行きました。が私は1人であることに徹しきれなかつたのです。ちょうど2年生のときの6月のことです。今から思えば愚かだつたと思うけれど、その時の私は、1人っきりの淋しさに耐えられなかつたのです。そして、OB、OGの方々、男子の励ましをもふみにじって、止めてしまったのです。あの後、伊東さんに「おまえが女子部をつぶしたんだ」と言われた時、どんなにつらかつたことか……でもすべてが私の甘さ、未熟さゆえにおきたことです。あの時もっとがんばっていたら……と今でもつくづく思うのです。今ではなんとか女子もたち直りました。本当に、OB、OG、そして男子たちの励ましのおかげです。これからも男子に笑われないう、女子なりに充実した活動をしていってほしいと思っています。

もっともっと書きたいことはたくさんあるけれど、きょうはここまで。

1974. 2. 18 大和田

山 行 報 告

9 月 沢 登 り

勘 七 沢 69・9

渋沢から大倉まで歩き、水無川の河原に幕営。

必要なものをサブ・ザックにつめ、バス停にもどってキスリングをあずける。四十八瀬川にそって二俣へ向う。二俣の出合は広い河原で、ここでワラジをはく。初めての沢登りに胸がわくわくする。堰堤を2つ越えると、沢は左へ曲がり、F1が見える。右から小さい小草平ノ沢が入るが、藪に囲まれているので見落しやすい。水しぶきをあげているF1の下に立つと、さあ登ってやるぞとファイトがわく。トップが登るルートと、ホールド、スタンスを緊張して、皆見まもる。F2をすぎると、大きい堰堤があり、しばらく行くと釜のあるF3。左岸をへずる。スタンスがないので困ったが、OBの指示で水中にあるのを見つける。技術書にへずりのスタンスは水の中によくあると書いてあるが、なるほどと思う。スラブ状の所で、岩に必要以上の恐怖心をもつ1年生が、そのままずるると水の中に落ちてしまう。このような所ではあせらないことが必要。F4を過ぎ、勘七沢最大のF5を見上げる。こんな所登れるのかと驚く。小川さんがザイルを取り出し、八島さんが3ツ道具を持って取付く。F5は、右岸の取付きのバンドをトラバースして中心にそい登る。下部はホールドが多いが、上部はホールドが細かくて少ない。八島さんが登り切って上で確保する。プーリン結びをして2年生が登ることにし、1年生は見物をして左の高巻きをする。私は、ザイルをつけると大声で「行きますっ」と言う。「よし」と八島さん。何が何だかわからぬうちに、無我夢中で登り切る。落口から下をのぞくと、1年生のうらやましそうな顔があった。ここから小さな滝がつづき、ゴルジュを通る。F8、F9を過ぎると傾斜がましてき、小さな滝がゆるい傾斜で連らなる。水源の涸決で焚火をして昼食。フランスパンを焼いて、マーガリンをつけたのがうまい。ここから、つめに入る。ルートがわかりにくい。小さな道が曲がりくねり、小さな尾根と尾根の間にできた凹状の溝の様である。急なガレ場をジグザグに登り切ると、両側がせばまって稜線に出る。予定の花立小屋付近ではなくて、花立の頭の少し先であった。塔ヶ岳へ行くが、曇っていて展望はなかった。

西 井 記

10月山行

飛龍～雲取山 69・10

この山行で、2年生は1年生の体力増進のため団体装備を1年生に持たせ、長い距離を歩くことを計画した。しかし、飛龍～雲取間はほとんど平担であるため、予裕もなく単に速く歩いてしまい、1年生はただ重い荷物をしょって、盲目的に前の者の足を見るだけで帰ってきたという、つまらない結果に終わってしまった。登山は楽なものではないのだから、苦しいトレーニングも必要だが、登山そのものがトレーニングで終わってはいけない。私たち2年生は、単に1年先輩が「魔の10月だ」と言って10月山行をトレーニング山行にしたから、自分たちも盲目的にそうしてしまった。これでは、1年生は“歩け歩け”しか先輩からおそわらないことになる。そうではなく、もっと重要な、道の取り方・山で迷った時の処置・雨が降った時どうする、といった山の中で自分1人で確実に判断し行動できる技術のトレーニング山行が必要ではなかったろうか。またコースにしても、時間的に安全で、よく知っているということで、飛龍～雲取にしたのだが、我々は5月にすでに雲取に行っており、未知らぬ所へ行くという新鮮な喜び（登山にとって必要不可欠）が全くなかった。11月と1月にも、同じように大菩薩峠へ行っている。日曜日だけでは、奥多摩か丹沢くらいが、我々の行動範囲である。故に月々の山行は山行記録を見てそのままコースや計画を決めてしまうマンネリ化がおきているのだ。日本地図を開けば、山はいたる所にあるのだ。目的地までの所要時間がかかって、長時間は山を歩けないが、人のあまり歩かぬ、未知の山を歩く喜びを得られる所はたくさんある。例えば、谷川岳の東方にある武尊山（冬雪を求めるのに手頃）、甲武信岳の北の十文字峠から三国山・十石峠や、西丹沢から山中湖方面、また故深田久弥氏が最期をとげた芽ヶ岳、夜行日帰りで少しきついが北八ヶ岳など。また丹沢や奥多摩でも、人の入らぬ小さな沢もおもしろいだろう。

永川からバスで御祭でおり、後山川にそって三条ノ湯へ向う。所々にわさび田が見える。途中で夕食をとり、さほど歩かないうち幕営地につく。場所が狭いために幕営に手間どる。

小屋の後から登る。山を斜めに横ぎって行くうちに、小沢を2つ越えると霧の中に色取り取りに紅葉した原生林の北天のコルへ出る。飛龍神社まで、きれいな赤黄の落葉の平担な道。飛龍の登りは、倒木が多く、キスリングがひっかかって困ってしまう。頂上は森林に囲まれ草ぼうぼうで、頂上らしくないので少し行きすぎてしまう。名前のわりにつまらない山だ。北天のコルへもどって、雲取へ向ってどんどん行く。岳雁台という岩を過ぎると、熊笹が延々と続く。道は平担なので、ピッチをあげてとばしにとばす。三条ダルミで昼食。ここから少し急になり、雲取山へ着く。人はたくさんいるが、霧のため展望なし。七ツ石山で小休止。千本ツツジ下で石尾根と別れて赤指尾根を下る。道は悪くない。ぐんぐん下って足も痛くなるころ、峰部落の家々が見えて

きて、真下に小河内ダムの青々とした水が見える。坂を走り下ると峰谷橋に出た。

西井記

新入生歓迎会

川苔山 70・4・26

参加者 CL・荒木仁夫、西井、吉田、甲斐、田辺、東郷（3年）、SL・荒木達郎、倉重、石川、松田、風巻、渡辺（2年）、森下、渡部、酒井、久米、橋谷、山田、山成、住山（1年）その他OB：OG多数

立川7：13—永川9：02—9：15川苔橋9：22—10：52百尋の滝11：03—11：35塩地谷小屋13：30—踊平14：06—14：55山頂15：21—17：09鳩ノ巣—18：30立川

新学期始まって以来、今日のために新入生獲得に狂奔し、その結果としてようやく8名ばかりの新入生が川苔へ行くことになった。ところが土騒日にサバサバ雨が降って、気が気でなかったが、どうにか行けそうな天気になった。

川苔橋より歩きはじめるが、トップの2年が不慣れで、速く歩きすぎて1年かつOBより不満の声。百尋の滝まできてみると、なんと林道が滝の上まで来ていた。みんな、空腹も手伝って悲憤慷慨。しかし、OBの滝登りを見物することができた。腹のムシにせかされて塩地谷小屋へと急ぐ。このあたりはやたらと仕事道が多くて、よく間違いそうになる。ようやく小屋に着いて昼食。どうも先発隊の顔色がよくない。昨夜と今朝がこたえたらしい。食事のあとはレクリエーション。ところが悲しいかな、2年はひとりも音頭をとれないで、食器洗いに専念。楽しい食事も終わり出発。残念ながら天気は下り坂で、山頂についた時にはなき出さんばかり。でも、このおかげで1年生の前に、山の名前の説明もできない2年生の実体を暴露せずにすんだ。あとは、先発隊、OB・先生の文句もものともせず、小雨に煙る山道をガンガン下る。

石川記

5月山行

三頭山～笹尾根 70・5・9～5・10

5/10

参加者 CL・荒木仁夫（3年）、SL・荒木達郎、松田、倉重、石川（2年）、森下、酒井、橋谷、木口、千賀、玉浦、中村、大友、加藤（1年）、小川（OB）

5/9 立川13：51—拝島14：20—五日市14：52—16：15数馬—16：20

幕营地

天気が悪い。明日が心配だ。バス停へ行くと、もう長蛇の列ができていた。1年生の時には、2年に指示されてどうにか乗ることができたが、2年になって指示する立場になってみると、一体バスにのれるのか、と心配になってくる。でも、全員なんとか押しこみ、キスリングに押しつぶされそうになりながら数馬へ向う。数馬へ着くと、早速幕营地を探しにかかった。すぐに幕营地を示す標識を見つけて、そちらへ行ってみると、あまり幕营地らしくない河原へ出た。ちょっとおかしいと思って近くの家へ行ってみると、やはりここが幕营地だという。川が増水したらやばいと思ったが、幕营地にも指定されていることだし、他に適当な場所もなさそうなので、ここにはることにした。水は、さっきの家で使わせてくれた。晩飯はマトンの焼肉。少し量が少なかったので、1年は食いにくそうだったが、おいしいと言ってくれた。

5/10 発6:22—数馬峠7:45—8:45三頭山9:03—10:06槇奇山10:18—11:08笛吹峠11:54—小峠12:21—12:50R・F13:00—13—15日原峠13—25—13:42R・F13:50—浅間峠14:19—14:57上川苔—17:37
五日市

起きてみると雨が少しパラついている。朝食はブタ汁だが、化学調味料を忘れてしまったため気の抜けた味。それに、一生けん命やったのだが、出発時間も遅れてしまった。どうも際先がよくない。バックを終わって空を見上げると、いやな雲ゆきで雨も本格的に降ってきそうだ。しかし、心を決めて出発。数馬峠の登りは工事中な上、雨も降っているためすべりやすく非常に登りにくい。峠でひと休みして三頭山へ向う。途中でもう1年がバテだした。今まで、バテてははげまされてきた立場だったが、今回は逆の立場である。パーティー登山がいかにもむずかしいか、少しわかったような気がした。三頭山頂はガスっていて何も見えない。小川さんに、北はどっちだと聞かれたが、はっきりと答えられなかった。2年になってもこれでは、と我ながら心細くなる。さて、いよいよ今山行のメインイベント・笹尾根を下る。これからは、ずっと下りだから体力的には楽だが、道がすべりやすいので、気が疲れてしまう。この尾根は割合ポピュラーなのだが、途中で2回も道を間違えてしまった。奥多摩の山道のわかりにくさと、2年の実力の無さを新ためて知らされたような気がする。今回の山行は、雨が降ってあまり良いコンディションではなかったが、かえって我々のいろいろな欠点が暴露されて、これからのためにはよかったと思う。

倉重記

6月山行 小金沢連嶺

70・6・20—21

参加者；CL荒木仁夫、SL荒木達郎、3年西井、2年石川、倉重、1年酒井、木口、久米、森下、渡部、加藤、大谷、橋谷、千賀、OB小川健吾

夏山を後立山に決定し、それへの体力的、技術的向上をはかってコースを考えたところ念頭へ浮かんだのは、去年やった小金沢連嶺であった。ある程度の長さで高山的ムードを楽しめることからここに決定した。

20日 見慣れたゴロゴロ道をバスで上り裂石でおりにたころ日はまだいまだ山の上にあった。草のにおいとある一種の山の香り。ザックを背負ってこれを吸いこんだ時我々は生身に力がみなぎるのを知る。

夕闇せまる山道を息を切らして登ると、先程まで涼しかった大気も次第に真夏のものとなる。1年の一人が遅れ出す。肩がしびれてしまっているらしい。苦しそうだ。帽子であおいでやりしてがんばらせる。すでに暗くなった山の中で息づかいとはげましの声、みんなの中に奇妙な連体感が生まれる。小屋の灯が見えた時、各人は妙なる感想をもったであろう。

21日 暗い内から起きだして飯の用意、小鳥の声も聞けないほどに1年生は忙がしい。まずい飯を食って天幕出れば、外はあいにく曇り空、今日は雨が降らねばよいが。明霧の中を大菩薩峠へ向かう。しっとりと濡れた岩、草、土、木、朝の山はいい。晴れても曇っていても。

大菩薩峠はあいにくの天気ながら例によって若人の声が響いていた。1年生も元気そう、かつ楽しそうであった。少し登って石丸峠へまたおりる。この辺はひろびろとした草原で寝るによし、キジを打つによしと叢へゴソゴソと這いる者も何人か。ところが狼平付近で雨がパラパラ。だんだんふってきたので雨沢の頭の前で雨具をつけた。梅雨時の山はかんかん照りか雨のようである。牛奥雁腹摺山のあたりからまた1年がおくれてきた。まだ入部してから2ヶ月あまり、痩せて頼りない彼を励まして列につかせる時私は良心のいたみを感じるのだった。このあたりは特に倒木が多く手の使えない者には相当な責め苦だろう。笹をかきわけたり、倒木を乗り越えたりして黒岳についたころには雨は大体あがっていた。景色のよい少し先の場所で昼を食べ、雨のため増水した沢にそってつけてある道を1年を励ましながらおりた。林道に出てから初鹿野までがまた長かった。

石川 記

6/20 裂石16:10—福ちゃん荘19:00

6/21 発6:09—大菩薩峠6:51牛奥雁腹摺山9:21—湯ノ沢12:03—初鹿野14:58

70・7

夏山合宿

参加者 荒木仁 (CL)、荒木達 (SL)、石川、倉重、吉田、西井、久米、森下、加藤、大谷、玉浦、千賀、酒井、OB小川健吾、水口泰介

試験終了の日に準備会翌日にPTAを開く。一週間に強化トレーニング準備や一年の健康診断を行う。同行OBは、宮武、小川、両氏の予定であったが、宮武氏の具合で代って21期の水口氏が参加することになった。

◎7月23日 17時新宿駅集合 23時30分発アルプス54号に乗車。OB, OGから多数の差入れを受ける。

◎7月24日 6:39信濃森上—8:47平岩9:10—10:00大所10:47—12:00蓮華温泉口12:10—12:50温泉—13:00幕营地

アルプス号には森上まで乗車。乗り換えて平岩下車。土砂崩れのため、バスは駅前からは出ず、大所まで歩く。天気は非常に良い。30kgを越す荷は1年にはこたえる。大所口からバスに乗る。途中バスの窓から雪倉がよく見える。温泉口から少し歩くと幕营地。本来なら大池まで登るのだが重荷であることでもあるし温泉止りとなる。昼食後、歌を唄ったり、昼寝をしたりして各自適当に過す。

◎7月25日 起床4:00—発6:00—天狗の庭9:25—白馬大池11:35—就寝18:10

撤収のとき、18の天幕でラジウスのキャブをなくす。全員で捜したが見つからなかった。重荷をせ負っての入山は1年にはこたえる。酒井、森下、大谷がおくれる。大池に設営後、昼食をとる。午後は乗鞍の方へ遊びに行ったり、昼寝をしたりする。

◎7月26日 起床2:30—発5:00—小蓮華6:45—8:25白馬8:38—9:05—9:48—12:05鑓ヶ岳12:25—天狗小屋13:12

朝、雪溪の水がなく水を補給せずに出発。日曜のため白馬山頂は人でいっぱい。白馬山荘直下の雪溪で昼食。カキ永みたいに雪を喰う者多し。天気晴朗、剣や立山が美しい。順調に天狗小屋着、池の水はとともうまい。

◎7月27日 起床2:30—発5:05—天狗大下り6:00—不婦Ⅲ9:05—10:25唐松11:15—五竜山荘14:05—就寝18:02

難所 不婦の嶮を越る。重荷を背負っているためか、天狗の大下りから不婦Ⅱ峰まで休みなしで行く。落石には細心の注意を払わなくてはならない。唐松岳山頂で昼食とる。ルートをまちがえたらしく下を生野高校のパーティが追いぬいていく。しばらくして本道へ出た。五竜岳が迫っ

てくると幕営地である。到着がおくれたためまとまって張れず、17、18、22をわけて張る。

◎7月28日 起床2:30—発4:22—5:44五竜岳6:00—切戸小屋11:00—鹿島鞍部13:17

1Pで五竜へ。ここらまで来ると剣は白馬付近から見ると、大分形が変る。切戸小屋まではタラタラと歩く。小屋の前で昼食。いよいよキレットを越える。例によって時間がかかる。このころから雲が出はじめガスがかかる。北峰を巻いたあたりから雷鳴が聞えはじめる。小川氏の判断で、つり屋根に幕営。水は雪を溶かしてつくる。夜は冷えそうなので各自厚着をする。

◎7月29日 起床—3:00—発5:32—6:00鹿島槍南峰種池9:21—棒小屋乗越10:55—就寝17:45

前日の予定は冷池までであったが予定として新越乗越までの予定で出発。天気は良い。倉がかなり近づいてきた。途中、営林署のパトロールに会い、種池針の木間幕営厳禁と言われる。しかたなく棒小屋乗越に設営する。パトロールはいばり散らし甚だ気分が悪い。水は雪溪の水を使用した。

◎7月30日 起床1:30—発3:55—岩小屋沢5:05—新越乗越5:30—鳴沢岳6:05—6:45赤沢岳6:55—8:27スバリ9:00針の木岳10:14—峠10:50—扇沢15:00—大町16:11—新宿解散9:20

前日の予定が大幅にくるってしまったが、朝早く出発し下山することにする。起床午前1時半東京の生活なら床に入る時間である。1Pまでは懐中電燈を使う。越中側に黒部湖やアルペンルートのプロウエイが見える。完成すればミーちゃんハーちゃんがすばらしい山岳地帯へ汗を流さず上ってくると思うと不愉快になる。針の木岳の手前でOB在間氏に出合う。氏は森上の学生村へ来ているとのこと。針の木岳では前年、上の廊下で集中豪雨の為、行方不明となった。福田氏に黙祈をささげる。針の木雪溪の上で在間氏からトマトをごち走になる。雪溪をOBや3年の先導で降りた。1年にとって雪を踏むのはじめてである。無事に扇沢着。新宿で解散した。

○反省会等 反省会には小川氏水口氏また田中将利氏が出席して下さった。

今回の山行は天候に恵まれ非常に順調に行なわれ、雨に一度も会わなかったことから1年にとっては大へん楽しい山行であった。不帰、切戸などOBの力にたよった面が幾分あることなどが特に指摘された。

このことから後に、リーダーシップについて、色々論議がかわされた。

久米記

9 月 山 行 丹 沢 沢 登 り

7 0 ・ 9 ・ 2 2 — 2 3

参加者；水無川本谷隊、CL吉田、SL石川、西井、久米、酒井、千賀、OB宮武、

新茅沢隊、CL荒木、SL倉重、森下、大谷、玉浦、加藤、OB小川

2 2 日 1 7 : 4 0 大倉—1 7 : 4 7 幕营地

2 3 日 発 6 : 2 5—新宣橋 7 : 1 0

<新萱沢隊> F 1 7 : 3 2—9 : 2 0 (L) 9 : 4 5—鳥尾山頂 1 0 : 2 0—塔ノ岳 1 1 : 5 0

<本谷隊> 出合 7 : 2 3—F 1 8 : 2 7 沖ノ源次郎沢出合 1 0 : 2 0—1 0 : 3 6 (L) 1 1 : 0 7—塔ノ岳 1 3 : 1 5—<合流> 1 4 : 5 5 大倉 (曇後雨)

去年から始まった9月の沢登りも今年で2回目を迎え交通の便等から水無川本谷と新萱沢においてそれを行なうことに決定した。また近来普遍的となったラジウス使用に対する批判としての薪使用、また山行後の反省会の感想会化への批判より反省会の革命的な新しい位置づけが行なわれた。しかしこれらはいづれも上からの改革であり下から盛り上げてきたものではなかった。つまり反省会は3年より、薪使用はOBから意見されたものだった。これは一体どうしてなのだろうか。これは2年生が二人となってしまったこともあるにはあるが、従来からの道をただ単に安易に踏襲すればよいと考えているのではないか。確かにその道は一応安定して見える。しかし長く続けて同じ道を行く内に初めに切り開いた人の精神を忘れ、徒にただ形だけを受け継いでしまう。さらに悪くなれば良い加減に活動をする結果とならないとは強ち限るまい。過去かつ自分の存する現在を正しく批判的に見つめ、自己の方向を決定して、永久的に自己を革命していかなければならない。

2 2 日 河原へ降りテントを張る。次に夕飯である。今回は薪使用ということで、学校から薪を持ってきた。しかし少し足りないようなのでそこからひろい集めた。炉を築いて薪に火をつけるのだが、火はつかないで煙ばかり出て目が非常に痛む。それでもそのうちハヤンができた。ところが、テントの近くの馬鹿者が酒を喰って騒ぎ、ついに零時ごろまで寝られなかった。

2 3 日 薪でスパゲティを作って出発、途中新萱橋で2隊に別れた。

<新萱沢隊> ゴルジュ地点で草鞋^{ワラジ}を履き、眼前の2つの小滝を登る。次に8mのF1を右からそしてF4までなんとなく登る。水しぶきが新鮮だ。我々の他には1パーティ。静かな沢だ。いつのまにか大淵、この沢の滝中最大のものである。しかし非常に難しそうで人工登攀の必要があるかも知れない。これは巻く。F10まで難無く行く。雨後なのに水量はない。そのうち雨が降り出し雨具着。水が伏流してから少し先にチョックストーンがある。昼を食い、しばらく行く。

筐の中に入り鳥尾山頂についた。そのまま塔ノ岳へ行き、寒さに震えつつ本谷隊を待った。

<本谷隊> 本谷の出合は人でざわめいていた。ここから草鞋^{ワラジ}をつけ石川をトップに行く。途中で小滝に出会い、そのたびにF1かと思うと違う。イライラしてくる頃ようやくF1にオーダ一通りに登る。左岸より背戸の沢が入りすぐ上に水ぎわを登るF2があった。水苔が生えており、少し危ない。いくつか小滝を越しF3の前で休み。1年も今回非常に楽しんでいるようだ。OBが先にF3にチャレンジするが落口近くがハング気味、とても現役には難しいと巻道を行く。人が多く滝ではいつも時間待ちを余儀なくされる。F4を登るところから雨、昼にはやむ。F9まで順調に行く。大棚F9も登ろうと思うが先行パーティーの女の子が必死の表情で岩にかじりついてて果さず。しばらく行くと水がなくなり、やぶをつめて塔ノ岳へ。塔ノ岳で長時間お待ちいただいた新萱沢隊と共に1ピッチで大倉まで下った。 石川 記

2月山行 那須・茶臼岳

71・2・20—21

参加者；CL倉重、SL石川、松田、久米、森下、酒井、OB上遠野

2月20日 黒磯17：10—湯本19：35—硫黄精練所

2月21日 発6：30—那須岳8：15—峰ノ茶屋11：55—大丸温泉13：20

授業の後電車で上野へ、なんせ那須は遠い。しかしたまには東北の山もいいもんだ。バスの車掌も登山客に擦れていなくて感じ良し、今年は去年と比して雪が多いようだ。雪の道を歩いて温泉の灯があたりすると何か本当に北国へ私は来たのだという感じが体に滲み渡っていった。硫黄精練所跡につく、幕営、スローモーである。下界での練習が足りないようである。さらにOBに色々文句をいわれた。これはどういうことなのだ。今までのOBは何故か幕営技術に対してなど何もいってくれなかったようだ。これでは現役の発展は望めない。また幕営技術中の細かい点には「すべて経験がものを言う」などと技術書には欺瞞的に書かれているにすぎないことなのでOBにはより一層の指導を願うものである。

21日 テントをそのままにサブザックへ用具を詰め込んで出発、全員完全装備である。茶臼岳へ直登していく。しかし直接には行かずまず途中の安全な場所でシュタイクアイゼンとピッケルのコンビネーション三拍子歩行、スリップストップ等、雪上基礎技術をやるが、上空の高気圧の影響により雪はズブズブとやわらかく、訓練の実を上げることができなかった。

硫黄を含んだ蒸気によって岩が露出している茶臼岳頂上へ、さし入れのリンゴなど食べ遠くの山を望めば山へ来たことの幸福を感じる。ここより去年訓練を行なった茶屋の鞍部へ向かう。途中多少ヤバイ所あり、しかし用意のザイルのOBにジッヘルしてもらい難無く通過、しかし1年

はまだまだ足もとが怪しげであった。茶屋において昼食を食う。去年の今を思い、月日の流れの速さに今さらながら驚く。

良い斜面なく元の最初訓練を行ないし斜面へ、スリップストップはさらに柔かくなった雪の為、ピッケルでなくして体だけで止まっているようなので訓練をあきらめ、燦々たる陽光の中を幕営地へ向かった。今回は去年の雪の少なさを思うあまり、スノースコップをもっていかなかったり、木ペグが少なかったりで冬山を甘くみすぎたようであった。天幕をたたんでスキー客でいっぱいの大丸温泉へこけつまるびつおりていった。

石川 記

春 山 合 宿

仙丈岳アタック

7 1・3・21—26

参加者；L倉重、石川、松田、久米、森下、酒井、OB伊東、岡田

21日 見送り多数、差入れ多し、即ち重し、一喜一憂。意気揚々と東京を後にする。

22日 馴染の戸台茶屋を後に、単調な河原を、前衛の雄々しい山を眺めつつ、3ピッチの着実なペースで丹溪山荘までゆく。昼飯を食いつつも、この後の600mの高度差を考え、全員の体調を把握する。八丁坂の急坂は、アイゼンをきかして登る。酒井が遅れ、森下が肩の痛みを訴え始める。ルート付近の赤布の行列が、この山塊の安易さを思わせる。バテた二人を励ましつつ、ガンガン掛け声をかけて、峠を越え、小流となって流れている北沢沿いに幕営する。皆の疲労が相当なので、飯を食ってすぐシュラフにもぐり込む。

23日 曇後吹雪 朝起きると、雲が低く、体調の完璧でない我々の行先をますます暗くした。ともかく今日は高度をかさがねばならない。峠までの雪面は踏みかためられ、全く気にならない。ちょうど合宿中の富士高山岳部に出会い、互いの健闘を祈った。峠通過時点から、若干吹雪いて来る。票沢の猛烈な登りに取り付き、樹林帯の深雪の中をシコシコ登る。樹林帯を出ると、クラスト気味の雪面下のハイマツの為にアイゼンの能率が悪く、また、ガスの為に、ルート判断に難渋し、相当な時間的肉体的消耗が強要される。しかし、怒声罵声の中に、皆、頑張り抜き、頂上直下の露岩を巻いて、票沢の頭越しの平坦地に幕営するに至る。完了後、皆の疲労と、予想外の時間を考え合わせ、アサヨ往復を断念、残った時間は、ザイルワーク、雪洞彫りに終始することに決定。午後になると、天気は西の方から徐々に回復し、日没と共に北岳が絶大なる姿をのぞかせた。夜、雪洞の中で凍えていた三人のつはものが居た。

24日 さすがに稜線上だけあって風が強く、天幕撒収が長びく。票沢の下りは、雪が、べとついており、アイゼンが効かないので、慎重に下りたが、1年生一人が、20m近く、雪面を滑

り落ちるというアクシデントがあり、皆を緊張させた。峠からは、サブザックで、小松を往復する。吹きさらしの小松の頂上から見た駒の雄々しさは、やはり印象的で、登行意欲をそそられた。しかしそれと同時に、私達の微力さを痛感させられた。今日の行程は、非常に消耗な、かつつまらぬものであった。我々の力の範囲では往々にして、この無意味な、何の目的も見出せ得ない計画が移される。これを乗り越えずして、真なる登山が出来ようか。等々考えながらも、最大目的である明日への鋭気を養う為、早く眠りについた。

25日 春はつとめて、寒気が身にしみるが、それだけに天気は抜群。いよいよ待望の日来たる。我々が、この日の為に今まで一年間頑張ってきた事を思うと、一抹の不安と共に、胸の高鳴りを覚ゆ。二合目までは、枝尾根を登りつめる。道は、ブロードウェーの名に恥じずよく踏まれており、アイゼンの爪が気持ちよく雪に喰い込む。森林限界を越えると、雪はくさっており、だんごを壊しつつ、膝下のラッセルを続けていく。小仙丈手前の広い斜面には小規模な表層ナダレのデブリがある。小仙丈・仙丈間のやせた稜線は、雪庇こそないが、カールから吹き上げてくる強い風に注意しつつ慎重に通過する。かくして、難無く、頂上に至った我々だが、雪のついた三千メートルピークはさすがに一種独特の感動を呼びおこす。抜群の展望。目前のゴツイ駒、圧巻たり。野呂川を間においた日本国第二峰北岳。昨年我々が縦走を貫徹した鳳凰三山、早川尾根。なんと我々の活動の範囲は無限ではないか。……

この喜ばしい好天の中で、飯を食い、写真を撮り、各自、満ち足りた気分で、北沢に下る。午後は、北沢沿いの斜面で若干のザイルワーク、滑停練習をやり、夜は遅くまで、騒ぐ。

26日 山行通じて不調であった石川が、高熱を出した為、少し寝せて様子を見るが、さほどの事はなく、このまま、下っちゃう方が得策であると見越す。石川の荷物を軽減して、入山時とさしてかわらぬ雪の上を、戸台までゆっくり下る。

O Bの伊東、岡田両氏に、この紙面を貸りて心からの感謝を述べたい。

今回の春山合宿は、一年間の総括として、又一年生二年生への脱皮期における訓練山行として計画され、慎重に運営されたものであるが、これらの目的は、ほぼ到達せられたであろう。

倉重記

コースタイム

3/21 新宿23:45

22日 戸台8:00—丹溪山荘11:30 L—北沢峠14:30—幕営地15:30

23日 発6:20—仙水峠8:30—栗沢ノ頭12:30—幕営地13:00—ザイルワーク14:00~16:00

24日 発7:20—仙水峠10:40—駒津峰往復—幕営地14:50 (北沢沿い)

25日 発6:00—森林限界7:30—仙丈岳9:10 (L)—北沢峠14:00

26日 発8:30—戸台11:40—八王子19:30

夏山合宿 南ア南部縦走

71・7・20—29

参加者；CL倉重、SL森下、広瀬、角田、米倉、遠藤、戸倉、鐘江（1年）、石川、松田（3年）、OB山野

7・22 塩川につくと雨だった。雨雲は低くたちこめ、3年、OBの重圧感は自然と1年に無言のままひたすら歩くことを強要する。尾根取付で昼食。しかし誰が持っているか判らず皆ザックをあけてみる。なんと、バックを持っていたのは私だった。山行直前に2人が病気のため参加できなくなり、団体装をふやされたのだが、それをすっかり忘れていたのだ。非難轟轟。私、小さくなるばかり。降りつづく雨の中、登りつづけるパーティー、その前に現われる小学生の1団。愕然とする私の前を通り過ぎる彼らのなんと元気なことか。小学生「コンニチワ」ボク「コンチクショウ」。しかし、やがて聞こえてきた断続的なモーター音で元気が蘇る。三伏峠だ。心臓の鼓動に共鳴するようなモーターは、身体じゅうに生気を吹きこむ。そこからしばらく下って三伏小屋の幕営地に落ち着く。さんざん怒鳴られながらようやく張れたテントにもぐりこむ。体じゅうから湯気が出る。なおも雨は降る。夜中突然の響音に眠りからさめる。石が降ってきたかと思うような雷の音だ。テントは濡れ睡眠不足は避けがたい。

23日 雨の中を出発。小ぶりになったとはいえ雨は降りつづく。雨に濡れたニッコウキスゲを横に見ながら稜線を進み、権右衛門沢に入る。米倉の体調が悪い。少し様子を見てから出発。再び稜線をたどる。まわりはガスっていてまるで見えない。ツメの岩場は下から吹き上げてくる雨に出向えられる。三角点のある山頂にたどりついてもししたる感動がわからない。ここより高いところはないというだけで、5m先もよく見えない。すぐに下山。塩見小屋跡で昼食。ブルブルふるえながらビスケットを流しこむ。頭の前からつま先まで文字どおり全身ずぶ濡れで、かえってムレる雨具がじゃまな気さえする。咲きほこる高山植物もうつろな眼には映えない。やっとこさ帰幕。

24日 ^{依然}以前雨は降る。森下さんは濡れたシュラフでほとんど寝ていないという。上級生とOBの協議の結果9時まで待機と決定。9時、雨はやや小降りになり出発する。鳥帽子岳を通過するころから森下さんがバテはじめる。ついにふらふらとなる。ハイマツ帯に入ったところで昼メシにする。森下さんはほとんど食べられない。日頃の元気さからは信じられない。寝不足と、ただ一人の二年生という負担が大きいためらしい。小河内岳の避難小屋にたどりつく。かなり荒れ

ていたが、風雨は避けられた。3Pでやっと木の生茂った高山裏の露营地に着いた。

25日 予定より約1時間半遅れて出発。樹林帯を抜けるといよいよ荒川岳の登りである。ゴロゴロとした岩ばかりの登りだ。雨こそやんだがまわりは一面の霧で何も見えない。ひたすら岩ばかりを睨みながらの登りがつづく。時々岩がバックリロを開けている。ハッとして緊張する。ガスで先が見えぬから奈落にさえ通じているように感じられてしまう。やがて平になるとそこが稜線だという。またガタガタ濡えながら昼を食べ、中岳を往復し、下りはじめる。猛烈な速さだ。2時間近く遅れて荒川小屋にさしかかる頃、またしても雨が降り出す。もう1年はバテバテ。ところがその時声がかかる。「止まれノ」たとえその声がどんな声でもこのことばは1年にとって神の声だ。結局これから赤石岳を越えるのは無理ということで荒川小屋に幕営と決まる。さすがリーダー。この処置は非常に賢明だった。やがて雨はだんだん激しくなる。

26日 朝から雨。8時半に停滞が決まる。丸くなってさし入れにかぶりつき、手製のトラップや合唱が始まる。いつの代でも上級生は歌好きだ。いつしか俺達もそうなったから。尚もしつこく雨は降る。

27日 朝、晴れたノついに星空を仰ぐ。遠く東の空はまだ雷が光っているが、頭上雲一点ない空は星が輝いている。心も晴れた。昇りくる朝日を背に受けて足どりも軽くなる。汗も快い。すぐに赤石岳に登りつく。ここで昨日会ったOGパーティーに追いついた。チングルマやエーデルワイスがかわいらしく咲いている。表と裏とでは全く景観の異なる赤石岳を降りはじめると下からものすごいパーティーがやってくる。一人にゆうに二人分の荷物を背負わせ、女の人も重いザックを背負って息絶え絶えなのにムチでザックを叩きながら登らされている。俺たちはまだいいほうだと1年皆同情。広い百間平で蝶と戯れながらビスケットを頬ばる。ハエもここにこ寄ってくる。百間洞に幕営。近くのお花畑で花の中にうずもれて山野さんの美声に聞きほれる。これを聞くとさすがの我らも羞恥心はあるから声が出ない。そうしている間に倉重さんと松田さんはサンダルばきでスタコラ大沢岳に登って来てしまった。午後からはガスが吹きあげて来た。

28日 晴。百間洞を出るのに道がわからなくて苦労したがどうにか越えて、2つピークを越し兎岳。聖岳を前にして深く切れこんだ鞍部が、そしてその登りが思いやられる。予想通り苦しい登りだ。おまけにトップの奴が「頂上だ、頂上だ」と何回も叫ぶ。その度に期待はずれ。黙れ広瀬。山頂につきカルピスを飲めば元気回復。奥聖岳までヒョコヒョコかけて行く。石川さんがカメラを持ってライチョウを追っかけまわす。塩見から荒川、赤石といままで歩いて来た道のりの長かったこと。それらが今一望できる。苦労した後をふりかえると心の底から、再び前へ進む力が湧きおこってくる。自信、それが少しついたようだ。人生もこんなものだといいが……またガスがかかってきた聖岳を後にし、ニッコウキスゲの咲き乱れる聖平に着く。天幕の外でカレーを皆で食い、歌を

歌う。音程狂ってたっていいじゃないか。いよいよ明日は山を下りるんだもの。

29日 まだ暗いうちに出発。陽が出るころはもう上河内岳。茶臼岳が近くなった時3年が叫ぶ。「さあ見おさめだぞ」皆ふり返る。聖が見える。赤石が見える。感傷的にはならないが、実に成しとげた後の充実感で胸がいっぱいになる。ところがまた終わったわけではない。樹林帯の中をひたすら苦しい降りがつづく。広瀬が「もうだめです」となさけなくさげんで倉重さんに怒鳴られ、一番元気な戸倉でさえ足がつってしまう。河原にたどりつくとカルピスを川の水でおおる。うまい。裸になってかけずりまわる。また長い降りの後、畑薙の大つりばしを渡り、やっとの思いでバス停のあるダムにたどり着いた。楽しい登山、確かにそれはいい。でも三年間登り続けて最も印象に残った山は？と聞かれたら今の3年は皆この夏山を挙げるだろう。苦しかったが、最も充実感のあった山行であった。

遠藤彰記

コースタイム

7/23 塩川 9:05—尾根取付(L) 10:05—三込峠 3:15—三伏小屋 3:45

7/23 発6:20—権右衛門沢 8:15—塩見岳 9:40—10:15塩見小屋跡(L)
10:45—帰幕 12:30

7/24 発9:45—小河内避難小屋 12:20—板屋岳 3:00—高山裏露营地 4:20

7/25 発6:20—荒川岳(L)—荒川小屋 11:35

7/26 停滞決定 8:30

7/27 発5:45—小赤石岳 7:25—8:00赤石岳 8:30—百間平(L) 9:40
—百間洞 10:55

7/28 発6:00—兎岳(L) 9:45—鞍部 11:20—聖岳 12:20—聖平 2:20

7/29 発4:20—上河内岳 6:10—8:35横窪小屋(L) 9:30—畑ダム 2:
10—静岡 6:40

谷川岳 (個人山行)

71.9.15

参加者; CL森下、SL鈴木、戸嶋、角田、米倉、遠藤

夜明け前の土樽駅を出発し、懐電を頼りに茂倉新道へ入る。かなり急な茂倉の登りをどんどん進むとやがて陽ものぼり、万太郎山や朝日岳がみえてくる。息をきらしながらの登りだが、ふり返ると朝日がまぶしく、今までの道が遙かに見える。予定を大巾に縮めて茂倉山頂に着く。行く手の一の倉、谷川は霧に煙って見えない。山頂で一時間近くトランプに興じた後一の倉に向かう。ガスっていて視界は悪い。いつのまにか山頂につき、道標をながめながら通過する。ようやくノ

ゾキの付近でガスが消え、一ノ倉沢の登攀者を上からながめる。すいこまれるような気持ちと石を投げたい気持ちをこらえて細い稜線を進む。オキの耳直下で、マチガ沢をのぼってくる登攀者を眺めながら昼食をとる。気分爽快。これで2000mないのだから嘔みたいだ。トマの耳から肩の小屋を通り天神平へ着く。またしても早すぎるのでトランプがはじまる。米倉と遠藤は天神峠まで登る。公式山行を除くと入部以来はじめて天気恵まれ、荷物も軽く、その上、山が谷川岳では帰る気がしなくなった。

遠藤彰記

コースタイム

土樽4:40—矢場ノ頭7:25—川棚ノ頭8:05—8:47茂倉岳9:45—一ノ倉岳
10:00—10:45オキの耳11:25—トマの耳11:30—12:22天神平13:
45—土合14:22

1 月 山 行 (雪 上 訓 練)

丹 沢

72・1・29～30

参加者；CL森下、角田、米倉、戸倉、遠藤、中尾、OB山野。

1年にとっては初めての雪山である。しかし、一本松を過ぎ、花立を過ぎても雪はない。煌煌と輝く月と街の灯を眺めながらにぎりめしにかぶりつく。そこにも雪はない。中尾が腰の痛みをうったえ、遅れはじめる。花立からしばらく歩くとやっと雪が見えはじめ、林の間に幕営する。真夜中に雪とともに山野さんが登ってくる。

30日 まだ暗いうちに起きて外を見ると一面の雪。さっそくかき集めて溶かし、水をつくる。ようやく日が出るころにはもう出発。たいして深くはないが、やはり新雪はいい。トレースもほとんどない笹道を塔ノ岳から丹沢山、さらに蛭ヶ岳へと快調にとばす。朝の陽が頭の上にくる頃にはもう蛭ヶ岳で、昼をとった後雪上訓練を始める。アイゼンをつけてパカパカ歩く。形だけでもアイゼンをつけ、ピッケルを持つと初めて雪山に来たという実感がわく。俺もついに……という感じである。ただ歩いただけでもやっと山男の資格を得たようでうれしい。一時間余り歩きまわってから下山。姫次の前あたりから角田がバテて遅れる。パーティーの誰かが遅れると1年は喜ぶ。もちろん非常に同情することも確かだが、どちらかといえばベースがおちると自分は楽になる。励ましつつも感謝の気持ちを抑えるわけにはいかない。人間とは所詮エゴイストである。中尾は非常に元気で歩いている。姫次のあたりからハンターをよく見かけるようになる。自分がねられるわけではないが、あまりいい気持ちはしない。分岐を一つまちがえて沢ぞいの道に入ってしまう。結局あとで正しい道と合流したが、凍っていてよくすべった。突然キャンキャンと

いう鳴き声で立ちどまる。犬だ。すぐハンターがくる。へたをすると撃たれる、やばいと次々と考えが広がる。ガサガサという音で身がまえた我々の目を雄鹿が飛びこえてゆく。鳴き声は彼のものだった。ハンターは来ない。一同ホッとする。しばらく歩いて東野にたどりついた。帰りのバスから、月食を明日にひかえた月がなぜか大きく、赤く輝いて見えた。

遠藤彰記

1/29 大倉 15:25—一本松 16:45—19:02 R (S) 19:25—花立 19:40—幕営 20:20

1/30 発 6:45—塔ノ岳 6:50—丹沢山 8:18—10:25 蛭ヶ岳 (L) 12:07—姫次 13:30—東野 16:33

3月雪上訓練

那須岳 72・3・12～3・13

参加者；CL・森下、鈴木（2年）、SL・遠藤彰、角田、中尾（1年）、山野（OB）

3/12 上野 23:15

3/13 黒磯 7:10—大丸温泉 8:10—峰の茶屋 10:00—朝日岳 12:23—13:28 峰の茶屋（雪上訓練） 15:20—15:45 大丸温泉

黒磯の駅で4時間ほど寝る。バスを降りると、朝日岳山頂は雲に隠れて見えない。1年にとっては初めての雪山である。みんな興味と恐怖との入りまじった表情。硫黄精練所を過ぎた所でアイゼンをつける。1年がアイゼンをはずし、つけ直すためにそのまま腰を降ろして滑落した。峰の茶屋から朝日岳山頂までの2時間間に、ふたつのアクシデントに出会った。歩きだしてすぐ、我々の上を登っていた人が、足場がくずれたために滑落、ピッケルも帽子も飛ばしてしまっている。しかし幸にも深い新雪のため30～40mの滑落で止まった。山頂近くまで登ってくると、上から人が走り降りてくる。パートナーが200m程落ちたという。少し登って下を見ると、下の方で人がトボトボと歩いていた。山頂は苦勞して登ったために非常に気分がよかった。山を征服した、という気分である。下りは慣れたため非常に速かった。峰の茶屋で昼食をとる。うまかった。食後に雪上訓練。滑落停止はなかなかうまくいかない。訓練に熱中していて気付いてみるとバスの発車まであと25分。競争でかけ降りる。この山行で身をもっておしえられたこと、“特に雪山では一秒の油断がアクシデントにつながる。”

中尾記

春 山 合 宿 （八ヶ岳縦走）

72・3・25～3・30

参加者；CL森下、SL鈴木、角田、戸倉、中尾、遠藤、（OB）中村氏

3/25 新宿発。新しく購入した石油ポリがパッキングが不良で、中尾の装備が石油漬けとなる。OBの声援に見送られ、やっとのことで笑って出発。

3/26 茅野に着くと雨がシトシトと降っていた。バスを待つ間が非常に長く感じられる。角田が冗談半分に言った。「生きて再びここへ戻りたい。」とても実感がこもっていて、1年皆同感だった。バスが美濃戸口へ向かう途中から雨は雪に変わる。美濃戸口から4Pで幕営地の赤岳鉱泉に着く。40k以上背負っていた鈴木さんがザックマヒぎみだったが、鉱泉に着く頃は大丈夫だったようだ。午後美濃戸中山の斜面で雪上訓練を少しやる。雪はやむ。

3/27 鉱泉に定着し、赤岳をアタック。地藏尾根をつめる。アイゼンが靴によくあわぬため、戸倉がバカバカはずしてしまう。石室直下は相当雪庇が発達し、刃のような稜線をそろりそろりと歩く。赤岳頂上でまわりのながめを楽しみながら、そしてこれからの道の遙かな事を恨みながら昼食をとる。佐久側のなんとつまらないことか……。降りる。稜線から10分ほど降ったクサリ場を抜けたところで、角田が転落する。足元の雪がぐずれたため、彼は中尾をまきこみ、二人ですべり落ちてゆく。からまってしまったらしいがやがて離れ、中尾はピッケルストップでかろうじて止まるが、角田はそのまま見えなくなってしまった。中村さんが急いでかけ降りる。後に残った我々は中尾と共に中村さんの後をゆっくり降る。彼は無事だった。ちょうど沢に落ちたので雪のおかげで途中で止まっていた。バウンドした際にメガネを飛ばしたが、眼の縁を少し切った他に身体のところどころに打撲しただけであった。そのまま慎重に降る。午後は雪上訓練をやる。角田は元気だが、縦走は断念することに決定した。

3/28 硫黄岳を往復する。戸倉は依然アイゼンをはずす。遠藤もつきあう。昨日同様空は晴れ春の陽はまぶしかったが、風はとても強い。急斜面でまた遠藤がアイゼンをはずす。森下さんが強風にさらされながら何も言わないで、つけなおすのを手伝ってくれた。うれしかった。午後は再び雪上訓練。顔を相当傷つける。

3/29 森下さんと中村さんが阿弥陀岳をアタック。鈴木さんと1年は残って雪上。午後も雪上。もう身体のあちこちが痛い。

3/30 いよいよ下山。入山の時よりだいぶ雪が少なくなり、泥だらけの道を下る。出発するころ降りはじめた雪がやがて雨に変わり、それがやむ頃美濃戸に着く。山荘でお茶をごちそうになる。山荘から1P、泥だらけになって美濃戸に帰った。我々は、生きて再び茅野に帰った。

遠藤 彰 記

コースタイム

3/26 美濃戸口7:15—美濃戸8:25—赤岳鉱泉11:25

3/27 出発6:43—石室8:35—9:35赤岳(L)10:10—石室10:35—
角田転落10:45—鉱泉、雪上開始11:50—終了15:30

3/28 出発6:30—稜線8:00—8:45硫黄岳9:00—鉱泉(L)9:55—雪
上訓練12:30—終了15:15

3/29 森下、中村出発6:40—7:40雪上訓練10:45—鉱泉(L)13:00—
雪上終了15:30

3/30 出発6:15—美濃戸7:20美濃戸口8:05

雪 上 訓 練

幽 ノ 沢 72・5・5

参加者；遠藤彰、米倉、広瀬（2年）、梶内、山野（OB）

2年は7人いるのだが、今回の参加者は3人、しかもそのうち2人は積雪期にはサボっていたため雪のお相手ははじめて。それに対してOBは、西朋の中心である梶内氏と山野氏。このメンバーをただけで、この1日現役がどんな目にあったかわかるだろう。

早朝に土合に着いて、そこから“近道”を通過して幽の沢の出合へ。予定では芝倉沢で行なうはずだったが、OBの「ここでいいだろう。」のひとことで決定。幽の沢では数パーティーが雪上訓練をやっていた。我々もさっそく準備をととのえて訓練開始。はじめはキックステップ、登って下ってトラバース。ひととおりやってからもっと急な斜面にうつる。なまはんかなけり方をすると、体を支えきれずに落ちそうになるため、力まかせにけているせいですぐに足が痛くなる。下っている時に広瀬がスリップ、まだ滑落停止を練習していなかったため滑るにまかせて、OBまでまきこんでしまう。そこでまず滑落停止をやろうということになる。現役は、キックステップをしなくてよくなったと喜こんだが、さにあらず、登っては滑り、登っては滑り、人数が少ないから息つく暇もない。登ると山野氏の指示で滑り出して、「止まれ！」の号令でピッケルを打ちこむが、ズルズル……。下でまちまかまえている梶内氏がピッケルでたたいて、「オレの所まですべってきたぞ。」そしてまたトボトボと登っていく。やりはじめてしばらくたった時、米倉がみごとな滑落停止をやった。号令とともに打ちこんだピッケルは、みごとにささってその場で止まり、それを予想していなかった彼はピッケルにブランとぶらさがっていた。そうこうしているうちに、雨が降ってきた。とけた雪の上をすべり、上からは雨をくらって、みんなビショぬれになってガタガタふるえだす。じっとしていることもつらい。しかし、練習のペースはおち

ない。なきたい気持ちになってくる。

最後の仕上げとして、少し上に登ってみる。登って行くと、まわりに大きなブロックがたくさん落ちている。なだれの通り道ではないかとびくびくしていると、ザーという大きな音がきこえてくる。なんの音なのかわからないできょろきょろしていると、梶内氏が「あそこだ。」と上の方を指さす。見ると、沢の最上部の2つの岩の間から、ちょうどぞうきんをゆすいだあとのドロ水のようなものが落ちてきた。我々のところへは、なにも落ちてこなかったが、さっさと下る。そしてまた前と同じ所で、滑落停止を10本ずつやる。みんな疲れてきて、なかなか止まらずに梶内氏の所まで落ちていく。そうするとようしゃなく「もう1本。」と声がかかる。それもどうやら終わらせてピンヨぬれで下山。帰りは近道ではなく、ほそ道路を一の倉その他をおがみながら帰る。山野氏と遠藤のくつのビブラムがはがれて、ピタピタへんな音をたてていた。

現役3人にOB2人というメンバーであったため、つらかったが有意義な雪上訓練だったと思う。

広瀬記

6月A山行

三頭山 72・6・10～11

参加者；CL・森下（3年）、SL・遠藤彰、戸倉、中尾、広瀬、米倉（2年）、伊東、遠藤信行、副島、水森（1年）

6/10 発12：50—15：10五日市16：30—17：35笛吹17：43—18：37幕营地

定刻前に出発。順調なすべりだしだったが五日市でつまづいた。調べておいたバスがなかった。考えた末、笛吹から50分程歩くことにする。そのため幕营地着は遅れたが、定刻に就寝することとはできた。

6/11 発5：32—三頭山東峰7：45—7：55中峰8：05—西原峠9：23—12：40浅間峠12：50—13：23上川乗14：00—14：48五日市

初めての山行にもかかわらず、1年の準備がよくできて、予定より1時間早く出発。1ピッチ目でかなり苦む。いいかげんいやになるころに山道に出る。森の中のためそう暑くない。1年に読図をさせたりしながら、だいたい予定時刻に山頂に着く。ゴミのそばで10分の休みをとり下る。蛇を見たり、リスを見たりするたびに止まるため、少し遅れぎみとなる。日に照らされながら単調な尾根を下る。終わり近くになり1年がひとりふらつきだしたが、休みをとらずにがんばる。林道の手前で沢に降りてしまったが、そのまま強行して無事林道に出た。予定よりも1時間早い下山であった。

1年にとっては初めての山行であったが、見事に計画通りに進み、順調な1年のスタートだといえる。

米倉記

6月B山行

大菩薩峠 72・6・24～25

参加者；CL・鈴木（3年）、SL・遠藤彰、戸倉、角田、中尾、広瀬、鐘江（2年）、遠藤信行、伊東（1年）

6/24 発12:35—15:15塩山15:40—16:15裂石16:25—19:25福ちゃん荘

2年から「大菩薩はつらかった。駅にたどりついた時は、もう倒れる寸前だった。」と、聞かされていた1年は、少し不安そうだ。「風が冷たい。ひとり体調が悪い者が出た。予定より1時間程遅れて、福ちゃん荘に到着。体調の悪い者は、薬を与えたがはいてしまう。雨が少し降りはじめ。翌日のことが気になる。

6/25 発7:00—7:56大菩薩峠8:06—10:15ルートファインディング 10:50—12:02牛奥雁腹摺山12:15—13:50黒岳14:05—湯沢峠14:40—17:45初鹿野

思ったとおり雨。予定より30分ほど遅れて出発。大菩薩峠では、たくさんの人が500円札をながめていた。体が濡れて非常に冷たい。林の中から稜線に出たとたんに視界が開けた。みわたすかぎりの花園だ。心の中がすっかり清められたような気がした。雨さえ降っていなければどんなにか良いことだろう、と思って歩く。その後の林の中には倒木が多い。はっと気がつくと、いつのまにか稜線からはるかに下っていた。その先には人の歩いた跡もない。1時間近くのルートファインディングの末、ようやく稜線にもどる。予定よりかなり遅れている。今日中に帰れるだろうか。しかしその後は順調にゆき、林道に出た所の“徒歩90分”の立てふだを見て、あと少しだと自分をはげます。雷の鳴る中を速足で歩く。90分たったがまるで見えない。雨は強くなってゆく。早く着替えたい。ようやく駅につくとすぐに着替えた。列車がきた時にはまだ着がえたばかりで荷物もまとめていなかった。列車の中で、雨さえ降らなければ、と稜線で見た花園を心に浮かべて思った。

中尾記

夏山合宿

北アルプス南部 薬師岳～槍ヶ岳

72・7・24～30

参加者；CL・遠藤彰、SL・米倉、戸倉、中尾、角田、鐘江、広瀬（2年）、遠藤信行、伊東、副島、水森（1年）、山野（OB）

7/24：上野発20：51

台風接近のため3日延期された夏山合宿に出発。まだ台風が完全に去っていないため、天気心配される。延期されたためか、OBの見送りも少なくさびしい出発となった。

7/25 4：51富山5：28-6：00有峰口7：20-8：50折立9：28-10：00L10：40-12：43昼寝13：40-15：40薬師峠

富山から有峰口まで富山電鉄。折立までは、狭いガタガタの道のためバスに酔って苦しんだ者がだいぶいた。折立からの登りは、林の中のきつい道だ。もし天気が悪かったら苦しい入山となっただろう。三角点に出ると視界がひらける。ここで山野氏のさし入れであるスイカを食べ、しばし昼寝をする。台風通過後のためか、雲が美しい。階段状の道を1時間半ほど登ると、なだらかな坂の上に太郎小屋が見えてくる。100mごとの道標がいやらしい。薬師岳方面に少し下った所が薬師峠の幕营地である。

7/26 発6：17-7：50薬師岳（L）9：48-11：13帰幕

から身で薬師岳へ向う。薬師平から山頂まで、ガレが続く。頂上近くへ来ると、北側の大きなカールが見える。頂上では、立山、劔岳をおがみ、カールでシャーベットを食べる。ふり返って見ると、昨日登ってきた道を見わたすことができる。南方には目的地である槍や穂高が、はるかかなたにかすんで見える。帰幕が早かったため午後のはんびり。現役がホットケーキを焼いて食べている間に、山野氏は、薬師沢へ下る。イワナがいたそうだ。

7/27 発5：33-7：17上ノ岳7：30-8：43中俣乗越（L）9：33-11：40黒部五郎岳12：35-13：50五郎のカール

太郎小屋の前を通過して南下。薬師岳と対照的な、土のなだらかな山が続く、と思っていた矢先に黒部五郎の急な登りが現われた。ジグザグの道をあえぎながら登る横を、他のパーティーが追いこして行く。なんであんなに強いのかと感心したが、よく考えると我々が弱いのだ。黒部五郎の山頂に立つと、今までかくれていたカールが姿を現わした。まさに「スプーンでえぐったような地形」だ。カールのむこう側には、薬師沢をへだてて雲の平が広がっている。はるか下方、カールの底には、岩と水の間に点々とテントが見える。カールの底までかけ下って幕営。下る途中の雪渓で、一步ごとに転んだ者がいた。雪渓の雪でカンヅメを冷して食べる。

7/28 発5:48-6:38五郎小屋6:48-8:54三俣蓮華岳(L)9:53-10:45双六岳11:20-12:35双六池

五郎小屋までは、カールの底を進んで、そこからいっきに稜線まで登る。裏銀座コース、雲の平への分岐である三俣蓮華岳からは、裏銀、槍穂をはじめ北アルプス全域を見わたすことができる。双六岳への道は、ハイマツの緑と雪の白のコントラストが美しい。双六岳山頂からは、笠ヶ岳が真近に見えた。双六池は、すぐ目の下に見えていたが、ハイマツに行く手をはばまれてなかなか下れず苦勞した。雪溪の横のガレを下って双六池で幕営。大きな幕営地で、いる人も多いが、大半の人たちが笠ヶ岳へ行くようだ。

7/29 発5:08-5:40樺沢岳5:56-9:58槍の肩(L)10:35-11:07山頂11:25-13:44中岳13:50-14:05中岳南岳のコル

槍ヶ岳はまだだいぶ遠くに見える。樺沢岳まで登ったあとは、稜線上の登り下りである。硫黄乗越からは、左手には赤茶けた硫黄尾根、右手には焼岳などが雲の上に頭を出しているのが見えた。槍ヶ岳へは急な、長い、ガレた登りが続く。登るにつれてガスがでてきて、まわりに見えるはずの山々を見ることもできない。肩の小屋の前にザックをおいて山頂へ。頂上直下の、北鎌側へのり出して越える所が少しこわかったが山頂到着。一面ガスでなにも見えないためしばらく待つが、ついに肩の小屋がわずかに見えただけに終わってしまった。肩へ下る途中、我々の下りのペースが遅いために後ろの人々が“渋滞”してしまった。副島がクサリ場を下っている時、我々のうしろにいた人が、コースをはずれて横にある大きな石にすわった。そのとたんに落石。石は副島のいるクサリ場へ。逃げ道はない。クサリ場の入口にいる水森に軽くあたったあと副島の頭上へと落ちていく。下にいた山野氏が、とっさに副島をおさえこむ。しかし石はまっすぐにふたりの上へ落ちた、と思ったが、わずか手前でバウンドしてふたりの上をかするように通っていった。

ガスの中を大喰岳、中岳、と越えてゆくが、みんな疲れが出て30分1ピッチのペース、雪溪のふちを下って、石のゴロゴロした所で幕営。南岳から穂高連峰にかけての山なみが、雲海の上につき出している。

7/30 発5:46-6:25南岳6:32-6:45分岐-8:11天狗平8:29-9:36L10:29-11:38-ノ俣12:00-12:35横尾-13:23徳沢13:38-15:05上高地

3000mでの日の出をおがんで出発。分岐にザックをおいて南岳を往復。潤沢、屏風岩などが下方に見える。分岐にもどって、やせた尾根を下る。天狗平は、池に槍ヶ岳が映って見える美しい所だ。少し下ると槍沢に出た。沢全体につまった雪でスキーをしている人もいて、やたらと人の多い所だ。半分歩いて半分すべるような感じで下る。雪のなくなる所で昼食。食べ終わった時に、

後方からえんえんとつづく大パーティーがきたため、大あわてで出発。一の俣、横尾と下るにつれて暑くなる。徳沢までくると、一般の人々が多くて、我々のきたなさにあきれているようだ。上高地への1時間半は、平坦な道であるだけにかえってつらい。明神小屋で戸倉のお姉さんが、アルバイトをしていた。カップ橋で記念撮影をした後、次々に出るバスの順番持ちをして、ようやく帰途についた。

今年の夏山合宿は出発を延期したためか、天候にめぐまれた上、特にきびしい所もなかったので、快適だった。問題となるのは、槍ヶ岳での落石だろう。我々の進行が遅いのが根本原因かもしれないが、あのような所では、充分注意して、軽卒な行動をとらないようにすることは当然だろう。落石があった場合には、大声で下方へ伝えるのは当然のことだが、自分へ向ってきた時は、まず落ちついてコースを見ることだと言う。今回も山野氏は、コースを見て副島をおさえたそうだが、まさに、落ちつきと経験のなせる業だろう。OBの力のすごさをみせつけられたように思う。

広瀬 記

9月山行・沢登り

割引沢 72・9・22～23

参加者；CL・遠藤彰、SL・戸倉、中尾、角田、鐘江、広瀬（2年）、伊東、遠藤信行、水森（1年）、山野、伊東、中村、西井、依田（OB）

9/22 上野発0：36

上野に集合してみると予定の列車は先月でなくなっている。駅でねるしかないか。どうにか列車を見つけたが、それも途中までしか行かない。そこで仮眠をとり、六日町へ向かう。

9/23 6：25六日町ー7：30清水7：46一桜坂8：05ー8：35取付9：02ー
10：25落合11：15ー15：30コル15：35ー15：40割引岳15：
55ー16：28巻機山16：31一桜坂18：07ー18：30清水18：50
ー19：30六日町

昨夜のごたごたでなんとなく疲れが残っている。わらじを着けた時の山野氏の話によると、地下たびには2種類あって、底の厚い百姓用の物の方が、沢登りには向いているとのこと。吹上の滝で、投げ降ろされたザイルを追った伊東氏は滝つぼへ。胸まですぐ濡れ。アイガメの滝は山野氏と西井氏のみ登り、他は巻く。落合で昼食。ここで二俣の右側に行く。布乾の滝はスラブ。山野氏、伊東氏、遠藤彰と続けざまに落ちる。それを見た中尾は、わざわざ中央部へ出て、あと一歩の所で滑り、滑り台からプールへと直行してすぐ濡れ。行者の滝で時間をくい、かなり遅くなっている。最後の不動の滝は、両側から岩壁がせまり、非常に狭く大きい。山野氏と伊東氏が2

人がかりで、ハーケンを2本使って登る。現役も3人だけ登る、というよりひきずり上げられる。遠藤は最後の岩で苦勞するが越える。広瀬は、最後の岩で滑ってシャワーをあびる。中尾はハーケンがぬけなくて苦勞する。巻機山頂で伊東氏、依田氏と別れる。昨夜からの疲れのためか、水森が遅れるが、どうにか無事下山。 広瀬記

10月個人山行

甲武信岳～雁坂峠 72・9・30～10・2

参加者；CL・遠藤彰（2年）、SL・伊東、遠藤信行、副島（1年）

10/1 信濃川上6：47—梓山8：00—十文字峠11：20—三宝山15：40—甲武信岳16：45—17：10小屋

梓山に着いた。うすい雲はかかっているが上天気。道はしだいに急になり、林の中へと入ってゆく。十文字峠で昼食。大山のちょっとした岩場を越えて尾根に出る。三宝山の登りにかかるあたりから遠藤信行がおくれはじめる。登りがやたらと長く感じられる。もう少しと思ってもなかなか着かない。三宝山頂につくと風が冷たく感じられる。富士をバックに写真をとってから甲武信へと向かう。甲武信の山頂は三宝山に似ていた。かなり疲れているため、すぐに小屋へ向かった。食欲がない。翌朝の計画を変更する。

10/2 発9：00—破風山9：55—雁坂峠11：40—15：50塩山

秋晴れである。木賊山をまいて笹の平にでる。富士を見ながら快適なコースをゆく。雁坂嶺峠から西沢へ一気に下る。体力不足をつくづくと感じた。 副島記

春山偵察（北八ツ）

72・11・12

参加者；（CL）遠藤、（SL）戸倉、鐘江、中尾、広瀬（2年）

親湯6：55—流源橋8：30—大河原峠11：10—双子池1：05—大岳2：25—横岳3：20—ピラタス4：10—茅野5：30

親湯でバスを降り、晩秋の爽やかな山道歩きだす。ところが縦横にはしるジープ道で迷ったり、川原で一時間余り水と戯れた後やっと大河原峠に着く、途中天祥寺原では赤布をだいぶつける。大河原ヒュッテでネズミと食事を共にし、ちょうど噴火をはじめていた浅間山を後に見ながら、双子岳から双子池へ向かう。ほとんどパーティは組まず、ばらばらで双子池に着く。遠藤は赤布をつけながら進んだためかなり遅れる。カラマツ林の間にポツンとあるヒュッテは池とマッチしてとても絵画的な景観を楽しませてくれる。大岳の登りはゴツが多く、またかなりの急斜面もあ

り、重いザックを背負っての山行が懸念された。大岳直下の樹林帯で道がわからなくなり、ルートファインディングにてこずる。稜線に出ると風が非常に強い。それでも天気はすばらしく晴れていたため、秩父や八ヶ岳連峰はもちろん、北アの大キレットもはっきりわかるほどで、360度の展望を満喫する。予定の時間をだいぶオーバーしていたので、稜線を横岳へ急ぐ。夕日を追いかけるように横岳から坪庭へかけ降り、とびこんだロープウェイは最終便だった。没みゆく夕日に照らされた八ツの峰々を眺めながらロープウェイは下ってゆく。

付記：春山では大岳への登りを再び偵察に行き、大丈夫と判断したが、当日は猛吹雪で迂回せざるを得なかった。

遠藤彰記

11月山行

八ヶ岳 硫黄岳 72・11・18～19

参加者；CL・遠藤彰、SL・広瀬（2年）、伊東、遠藤信行（1年）、渡辺（OB）

この山行は春山の偵察も兼ねている。月例山行であるにもかかわらず、参加者は2年2人、1年2人というありさま。他の2年は、先週の偵察の疲れが出たためか参加しなかった。1年は、この2人以外は積雪期は参加しないとのこと。だいじな息子を思う親ごころのためか。

11/18 23時55分の鈍行で新宿を出発。

11/19 美濃戸口で、雲海をながめながら朝食。ひんやりとした空気、一面の霜が夏シーズン終わりのつげている。美濃戸の茶屋でよびとめられて茶を飲み、不用の定期券を壁にピンで止めてくる。赤岳鉱泉までは平坦な道が続く。川に氷がはっていた。赤岳鉱泉からは、正規の道ではない枯草の中の急な斜面を登る。冬ならばアイゼンをきかせて登れるが、まだ雪もなくかわいた土の上をすべりながら登ってようやく道へ出る。稜線上に出ると風が強かった。硫黄岳山頂からは八ヶ岳全体を見わたすことができ気分がよかった。爆裂火口に圧倒されながら夏沢峠へ下り、そこで昼食。歩いているとさほどではないが、止まると寒い。下りは単調な道がずっと続く。先週からの疲れのためか、広瀬は道をまちがいそうになったり、ころんだり、さんざんである。3時間半程歩いて、ようやくバス停に着いたが、バスはすでになく、やむをえず公民館でタクシーを呼んでもらって帰る。

広瀬記

スキー合宿

岩 岳 12・25～30

参加者 ; CL・遠藤彰、戸倉、鐘江、中尾、角田、伊東、(2年)伊東(1年)永井、水口、山本、吉田(OB)

春山へのアプローチという意味を含めて、72の最後を飾るスキー合宿であったが、その内容は、楽しくもあり、その反面、反省を強いられる所も多かったのである。

12月26日、早朝、信濃森上駅に降りた我々8名は雪国らしからぬ、異様な暖い風を感じていた。15分程歩いて丸七旅館に着くと、そこには先着のOB水口、山本両氏がねぼけまなこで我々を待っていた。それから、その後の予定を確認して、早速スキーを肩に山へ向かう。

暖い風は雪を溶かし、ゲレンデには所々、土が瀕をのぞかせている。そんな光景を目のあたりにしながら、何か嫌悪感に背筋を震わせて、リフトに乗り、4～500mは上っただろうか。さすがに、いわたけ山頂近くになると、風も冷たくなって、雪もちらつき始めた。練習に向けた斜面を見つけて練習開始。

みんな去年のレベルまで何とか“勘”を取り戻そうとがんばっている中で、1年の伊藤がスイスイ滑べり、ころんで雪まみれの2年生の羨望の眼を集めていた。その日は予定よりやや遅れて昼食を取り、午後3時半過ぎになってから下山。山も下の方になると到る所に土や石が出ていて、それをよけるのにたいへん。ただでさえ回ることができないのに……さんざんな目にあって旅館に着いたのは、もう日が暮れようとしている時。それから大急ぎで幕営。それも旅館の目の前の畑の中に決まり、春山の雰囲気は微塵もない。

2日目の27日からは、午前中は、斜滑降、山回りクリスチャニア等の基礎的練習、午後はリフトを使った、応用練習という具合に、スキー技術の向上に、みんながんばった。

3日目、4日目あたりでは、雨が激しく降ったりして、寒い思いもしたが、スキーの楽しさに比べれば、どうということはない。このころになると、みんなOBばかりに頼らず、独力で滑るようになっていた。そして個々の指導もOBから2年生側に移り、遠藤と鐘江が、時折、注意を促す程度に他の4人に当たった。水口、山本の両OBは4日目で帰られ、最後の晩を我々8人は旅館のこたつで楽しく過した。外は雪だった。

最終日は、前夜よりの雪が積もって、もうあたり一面銀世界。最後の滑降は西山スキー場で、自由に行なわれ、短い時間ではあったが、最も楽しい時となった。そしてその午後我々8名は名残り惜しそうに、白い岩岳を後に、東京へ向かった。

そんなわけで、今回は雪質が悪く、また雪量にも恵まれずみんな技術の会得に専心出来なかったし、幕営にしても緊張感に欠けたものとなり、初期の目的も達成出来ずに終わった。

1年生の健闘に期待する。／

鐘 江 記

1 月 山 行

雲 取 山 7 3 ・ 1 ・ 2 0 2 1

参加者 ; CL・遠藤彰、SL・戸倉、中尾、広瀬 (2年)、遠藤信行 (1年) ; 西井 (OB)

1 / 2 0 発 1 3 : 0 5 - 1 6 : 0 5 鴨 沢 1 6 : 1 3 - 1 7 : 2 0 小 抽

1年にとってはじめての雪山だが、参加した1年は1人。小抽に着くと西井氏が待ちうけていた。

1 / 2 1 発 6 : 0 5 - 8 : 5 0 ブ ナ 坂 9 : 3 0 - 1 1 : 5 5 雲 取 山 (雪 上 訓 練) 1 4 : 0 6
- 1 5 : 1 0 ブ ナ 坂 1 5 : 2 0 - 1 7 : 1 0 留 浦

予定より遅れて出発。遠藤信行が今回からトップをやる。トップのむずかしさを味わう。ブナ坂でアイゼン装。靴に合わせてこなかった者、バンドの通し方を知らない者などが多く、山行前の準備の悪さを感じず。山頂真近になって信行が遅れる。2年の声が飛ぶ。日原方面への下山道にトレースがなかったため下りは鴨沢と決定。山頂 (ザックを降ろしてはじめて気づいた。) はまっ青な空とまっ白な雪のコントラストがすばらしい。普段はまずい昼飯もとてもうまい。山頂付近でアイゼンワークの練習。信行は少々熱をだして横になっている。下りの途中から戸倉がトップ。ブナ坂でアイゼンをとり、留浦まで駆けるように下る。

今回の山行の目的が「雪中幕営、アイゼンワークに慣れる。」ことであったのに、1年の参加が1人であり、計画がうまく遂行されたとは言いがたい。

信 行 ・ 広 瀬 記

春 山 合 宿

大 河 原 峠 - 赤 岳 鉱 泉 7 3 ・ 3 ・ 2 6 ~ 3 1

参加者 ; CL・遠藤彰、SL・戸倉、中尾、広瀬 (2年)、伊東、遠藤信行 (1年) ; 渡辺 (OB)

3 / 2 6 新 宿 発 2 3 : 4 5

新宿で遠藤彰がソバまんじゅうによるソバ・アレルギーをおこしてザックの上で寝こみ、心配したが無事出発。

3 / 2 7 茅 野 6 : 0 3 - 6 : 5 0 親 湯 入 口 - 1 2 : 1 0 大 河 原 峠 1 2 : 2 8 - 1 3 : 5 6 双
子 池

テントと人数の関係がうまくいったため、1人30kg未満の荷ですむ。天祥寺原は白一色の平原で、方角もわからなくなりそうだった。大河原峠でアイゼン装。双子池で幕営後、渡辺氏、彰、戸倉が横岳偵察。進行可能とのこと。のこった者は、凍った池のはたで、春山の気分を楽しむ。

3/28 発7:56-10:50ルートファインディング12:00

吹雪。8時まで様子を見てから、横岳越えは中止して林道に向けて出発。普通なら停滞すべきだが、林道のため出発したが、苦しい行進となる。風雪激しく、ゴーグルをつけると雪がついて前が見えず、はずせば目をあけていられない。風が吹くたびにピッケルで体を支え、顔を下に向けてたえる。こういう時は、体重のある者の方が有利だ。軽い信行などはつらそうだ。11時ごろ、ついに林道を見失なう。1年をそこに残してルートファインディングをするが、雪にはばまれてまるでわからない。ルートファインディングの間、1年は、ツェルトをかぶって、歌をうたってせまってくる眠気をさける。やむなくそこで幕営。ひと休みしてから、彰と戸倉、渡辺氏と広瀬、2人ずつで偵察。彰と戸倉は縞枯山まで登る。渡辺氏、広瀬は、前人のトレースをたどって雨池峠へのルートを発見。夕方から天気は良くなる。

3/29 発6:10-6:50雨池峠7:03-縞枯山7:45-茶臼山8:47-9:20
麦草峠9:58-11:10丸山11:28-11:40高見石小屋一道をまちがう
-高見石小屋13:00-中山14:18-14:43黒百合平

天気良し。午前中は快調に進み、縞枯山の下りで少し道をまちがえた以外はなんということもなく麦草峠到着。昼食後丸山の登りにかかるが、かなり急な上雪も深い。交代でトップをやって登る。丸山から高見石小屋までは、あっというまであった。中山への道をまちがえ、かなり下ってからもどる。高見石小屋から黒百合平まで、犬が一匹ついてくる。トップの前を道案内をするように歩いていく。4本足だとあれほど楽に山に登ることができるのかとおどろかされる。中山山頂から突然雨が降りだし、一晩中降りつづける。雨の中で犬は一晩中テントの入口の前にいた。テント内が酸欠状態となり、ラジウスがつかなくなり、マッチも火花しか出さない。気分の悪くなる者も出て、空気の入れかえをするために入口をあけるが、寒い上、犬が入ってきそうになって、十分な空気の入れかえはできない。多少入れかえたくらいでは、すぐに酸欠状態にもどってしまう。ラジウスが不調だと非常に不安になることを知った。

3/30 発8:18-9:48東天狗岳10:08-10:18西天狗岳10:29-東天狗
岳10:48-箕冠山11:37-12:18夏沢峠13:00-14:18硫黄岳
14:49-15:40赤岳鉱泉

今日からはきのうまでとはちがったかたい、凍った雪のコースになるはずである。いよいよ南八ヶ岳となる。天狗岳のアイスバーンで、広瀬がアイゼンをはずし、つけるのに苦勞。天気も良いため、東天狗から西天狗を往復。東天狗の下りに1ヶ所狭い所があり、ザイルを使う。箕冠山から夏沢峠への下りで、予想外の深い雪になやまされる。腰までうまるため途中でワカンをつける。ワカンをつけたとたんに大転倒した者がいた。硫黄岳はたいした苦勞もなく越えることができた。山頂

は少々風が強かったが、横岳以南の山をながめたり、ふりかえって縦走してきた山々をながめたりする。赤岳鉱泉到着後、久しぶりの太陽の下で、ぬれて重くなっているシュラフなどをほす。晴れているというのは実に良いことだ。夜は遅くまで歌をうたって最後の晩を楽しむ。山に入ればよくやっていることだが、縦走成功の喜びと重なって非常に楽しく感じられる。各人の様々の悩みもつい口に出る。明日、下山前に赤岳に登ることにする。

3/31 発7:25-8:55石室9:04-9:24赤岳9:31-10:15帰幕・発
12:03-13:40美濃戸口

赤岳に登る。ガスのためになにも見えない。しかし、そのおかげでナイフ・リッジもなにげなく越えられた。昨年角田が落ちた所は雪が少なく、今年だったなら助からなかったと思われる。ついに雨が降りだして、山頂で落ちつくこともできなかった。かなり急な斜面をころげ落ちるようにして下山。テント内で昼食後、まっ白な山々をあとにして美濃戸へと下る。

昨年はたせなかった縦走コースを逆に縦走することに成功。渡辺氏によると、2日目の吹雪は当然停滞すべきであったが、林道であったため出発したとのこと。悪天候が続いたが、荷が軽かったこともあり、全員元気で乗り切ることができた。

広瀬記

雪上訓練

谷川岳幽ノ沢 73・5・13

参加者；CL・遠藤彰（3年）、SL・伊東、遠藤信行、東野（2年）、山野、伊東、松田（OB）

5/13 土合5:35-ツイタテ岩6:35-6:50幽ノ沢7:03-7:15-雪上-
L11:35-雪上-15:00-発15:15-土合17:05

土合につくと地上まで480余段の階段がある。この階段を一気に登れない者は、谷川へ登る資格がないなどと書いてあった本のことを思い出しながら地上へ出た。朝食を駅構内でとったあと幽ノ沢まで急いだ。天気がよく、途中の一ノ倉沢の姿が目に焼きついた。練習は、キックステップから始まり、トラバース、滑落停止へと進む。我々は、キックステップ、ドラバースで、足元を見てばかりで、そのたびにOBの声が飛んだ。滑落停止はピックの打込みから、反転、本番と進んだが、最後になってもうまく決められなかった。これは、地上でのトレーニングで、背筋・腕力などをつけることをおこたったことと大いに関係するものと思われ、その改良の必要性を感じた。

結果的には、1日の訓練でこれらすべてを行ったのであるから技術をつけたというより、感覚

をちょっとばかりつかんだだけで終わった様に思う。

遠藤信行記

6月個人山行

東丹沢主陵 73・6・2～3

参加者 CL・広瀬(3年)、SL・伊東、遠藤信行、東野(2年)、世利、小川(1年)

6/2 発14:00—大倉16:55—20:30 幕営

1年の1学期から個人山行というのは、めずらしいケースだが、1年が2人参加した。テストの終わった日であるため、なんとなく疲れている。大倉を出た時は、もう日も西に落ちかけていた。雨が降りだしたため、早目に雨具をつける。地面が濡れているため滑って登りにくい。だんだんだんとペースが落ちる。暗くなってからは、コースになれている東野がトップになるが、広い尾根の中で道がわからなくなり、遅々として進まない。予定より遅れて平らな所へ出る。ここに幕営。夜中に一度、歩いてきた人がテントにぶつかる。

6/3 発6:30—7:30 塔ヶ岳7:50—8:30 丹沢山8:45—10:30 蛭ヶ岳
12:00—14:59 東野

昨日かなり登ったと思ったが、まだまん中あたり。塔ヶ岳からは暑いため、みんな人目をはばからずアミシャツで歩く。山頂に着くたびに物を食べ、昼寝をしながら進む。尾根筋に水場がないためもっていった15ℓの水で昼食までまかなう。途中、不動の峰で、ボウフラがわいているとも知らず、雨水をむさぼり飲む者もいた。蛭ヶ岳で昼食。カルピスを5ℓつくる。うまい。小屋でバスの時刻を聞き、それに合わせるべく少し強引に下る。全員元気で下山。

テストの翌日、カモシカ、水不足、と多くの不利な条件があったが不慣れな1年も含めて全員よくやったし、十分に楽しめた。

広瀬記

5月山行

鷹ノ巣山～雲取山 73・5・56

参加者; CL・遠藤、広瀬(3年)、SL・伊東、遠藤信行、東野、副島(2年)、浅間、小玉、林、小川、青谷、野口、世利、山本、松本(1年)、久米、森下(OB)

5/5 西高発9:30—11:14 立川—12:24 奥多摩—13:15 峰谷谷14:15
奥—14:35 浅間神社—17:00 避難小屋

1年にとっては初めての山行である。ぼく達2年としては1年に山のきびしさと楽しさがわか

るようにと、雲取山への2日の山行を計画した。奥部落から避難小屋までは単調な登りである。ゆっくりペースをとって進んだのだが、初めての重荷ということからおくれるものもあった。

5/6 発：00 - 6：40七ツ石 - 7：20奥多摩小屋 - 8：25雲取山 - 12：47留浦

快晴である。1年にとって良い山行になればと思いつつ出発する。あたりは新緑がすばらしく七ツ石あたりまではさしたる登りもなく快適な山行であった。1年も山歩きの楽しさがわかってくれたらと思うのにバテテおくれる者がでた。しかしまだ雲取の登りでもないのでファイトをかけてがんばらせた。奥多摩小屋を過ぎるといよいよ雲取山の登りである。かなり急な登りを登りきると雲取の山頂が見え、あそこまでだといって1年をがんばらせる。山頂からの景色はすばらしい。昼食後歌を歌って皆ではしゃいだ。山頂に別れをおしみ急いで下山した。下山後かなりバテたものがいたようだ。

全体的には楽な山行になったようだが1年は山を甘くみないで毎日のトレーニングをしっかりとやってほしい。

副島記

個人山行

南ア・北岳～塩見岳 73・8・4～8

参加者；CL・遠藤彰、SL・伊藤、遠藤信行、東野

8/4 甲府13：30～16：45広河原

今回の山行の目的は、転量化による行動半径の拡大にあるため、ペミカン、シュラフカバーによる睡眠などにより、荷物を15kg以内におさえて入山する。

8/5 発6：00～13：00北岳13：30～北岳稜線小屋

個人のペースを尊重しようとのことで、各自マイペースで歩き、11時に北岳山頂で待ち合わせことにする。ところが先発した2人が八本歯のコルの所で1～2時間まっても後の2人がこない。心配していると山頂の方から妙な声がするので行ってみると、後の2人は、途中別のコースを通り、山頂に行ってきたとのこと。とんだ冷汗をかく。

8/6 発6：30～北岳往復8：00～10：00間ノ岳

もう一度、4人そろって北岳に登ってから間ノ岳に向う。全員間ノ岳の魅力にまいてしまい、ここで幕営決定。山頂下10m位の所に幕営し、たき火でホット・ケーキをやいて、昼寝ときめこむ。水は近くの雪田の雪を使う。間ノ岳を占領した気分になる。夜、太陽の恵みを受け、ヒリヒリと温かく眠られる。

8/7 発6:00~8:30 農鳥岳 9:00~11:30 間ノ岳 12:30~2:00 熊ノ平~5:00 北荒川岳傾面

農鳥岳山頂で、間ノ岳に黄い我々のツェルトがあるのが見え感激する。今日は昨日の分を取りもどそうとすこしハードな行程をこなす。今回の山行では石油の消費を減らすために焚き火をできるだけ使用しているが、火力の強い点など焚き火の利用価値を見直させられる。夏山合宿からひきつづいて山に入っているため、人恋し病にかかり明日下山 決定。3食分ほどまとめて食べ満腹感を味わう。

8/8 発6:00~8:00 塩見岳 8:30~10:45 三伏峠 11:30~12:50 奥沢井

予定よりかなり早いペースで下山する。途中、川原でカッターシャツなどを洗い、山のアカをきれいに落とす。

伊 東 記

個人山行

金峰山~国師岳 73・9・14~16

参加者; CL・伊東、東野(2年)、浅野、世和、SL・林、野口

9/14 斐崎 18:20~増富鉱泉 19:45~ミズガキ山荘

9/15 発6:50~金峰山 13:15~朝日岳~15:20 大弛

9月にしてはめずらしいほど日ざしの強い中を登り金峰山山頂に立つ。連休にしては人が少なく、歌など歌いのどかな山行を楽しんでいたが、大弛で車の行列を見て興ざめする。

9/16 発4:50~北奥千丈岳~国師岳 6:20~不動小屋 10:10~14:15 塩山

北奥千丈での大天望に感激する。それから国師岳をへてゴツゴツした岩だらけの天狗尾根を下る。次に西沢に出たが、天狗尾根とくらべ、極端に観光地化されて人が多いのに驚く。今回の山行は、1年生が始めて計画、準備すべてを自力でやったが、なんのトラブルもなく快い山行ができた。

伊 東 記

個人山行

塔ノ岳~蛭ヶ岳 73・9・14~16

参加者; CL・遠藤、副島(2年)山本、SL・小玉(1年)

9/14 西高発 15:10-17:38 ヤビツ峠-18:10 表尾根登り口

1年の自主性にまかせた山行だったが準備の遅れがめだち、用具の不備や忘れ物などが多か

ったのは大きなミスである。ヤビツはまでバスがある予定だったがなかったため衰毛より歩く。

9/15 発5:00-4P-9:50 塔ノ岳-丹沢山-不動の峰

丹沢の尾根はけっこう上下の差があっておもしろい。三ノ塔まで登りつめてしまうと後は楽しい尾根歩るきが楽しめる。昨日まではどんよりと曇っていたのに今日は快晴である。塔の岳あたりで曇ってきた。今日は水の関係で不動の峰に幕営を変更した。夕食後のたのしい霧囲気の後就寝。

9/16 発4:00-5:15 蛭ヶ岳-檜洞丸-9:30-板小屋沢ノ頭-13:00

西丹沢-14:30 新松田

まだ暗い中を蛭ヶ岳に向かって出発する。蛭で日の出を待とうと思ったが曇っているのでやめる。蛭の下りはすごい。一直線に下っている。まさに初秋の風に吹かれながらの山行は快適なものであった。一気に檜洞に登りあとは下るだけ。荷の心配もなく楽しい山行だった。1年の初めの個人山行としてはまずまずだろう。

副島記

9 月 山 行 ・ 沢 登 り

丹 沢 ・ 水 無 川 本 谷 7 3 ・ 9 ・ 3 0

参加者；CL・伊東、SL・遠藤信行、副島（2年）、青谷、松本、野口、玉田（1年）、
遠藤彰、広瀬（3年）、山野、中村、吉田（OB）

9/30

3年生と合流し本谷にかかった時はもうかなりの雨が降り始めていた。F1に時間がかかったので心細くなった。F1には横にくさりがついているのだが滝のシャワーをあびてのぼった。スリル満点であった。登っていくうちに沢とはこんなにすばらしいのかと思うようになり昨年行けなかったのが何とも残念でしかたがなかった。最後の滝をまいてあとはヤブこぎだった。ヤブこぎで1年が少しおくれたががんばって塔ノ岳山頂に登った。小屋でしばらく休けいした後、雨のふりつづけるやみをつけて出発した。走るように下ったが1年の1人が足をくじいてしまった。まことに残念である。そのため下山はかなりおそくなってしまった。

沢の楽しさを十分に味わった山行だった。

副島記

1 1 月 山 行 (ボ ッ カ 山 行)

丹 沢 ・ 表 尾 根 縦 走 7 3 ・ 1 1 ・ 1 0 ~ 1 1

参加者 ; C L 伊 東、S L 遠 藤 信 行、東 野、副 島 (2 年)、遠 藤 彰、広 瀬、戸 倉、鐘 江、角 田 (3 年)、青 谷、小 玉、世 利、野 口、松 本、林、小 川 (1 年)

1 1 / 1 0

今日は、戸倉さんの誕生日だった。明日にそなえて早く就寝させた1年とはうらはらに、最後の山行だということと、戸倉さんの誕生日が重なったということで、この日、3年生が演じた珍事の数々は、また場所を新ためてご披露することにしましょう。

1 1 / 1 1 発 5 : 5 0 - 7 : 5 1 駒 止 8 : 2 6 - 1 0 : 5 9 塔 ケ 岳 - 1 2 : 1 5 大 日 岳 - 1 4 : 4 5 鳥 尾 (別 れる)

今山行は春山に備えてのトレーニング山行だったので、河原の石をしょわせ、30~35kgずつしょわせた。

毎度のことながら、朝は世利の調子が悪い。今日も1P目から、ゲエゲエうなりながらついてくる。途中、2、3度調子をみたが、よくなるないので、駒止小屋で便をさせた。このため、40分の大休止となってしまい、このことからして、今山行の失敗につながっていたように思う。バカ尾根の真髓に出ると、野口のバテがひどくなり、声をかけても返事もしなくなってしまった。東野と2人して、ひっぱり上げながら、やっとこ付いた塔ノ岳がすでに10:59。

昼食をとった後、表尾根にはいっても、あいかわらず野口のバテがなおらず、新大日の登りでもとうとう鼻血まで出すようになってしまった。なんとか新大日まで登らせたが、出血が多く、このままパーティに付けるのは、無理のようなこと、及び、他の1年のトレーニングにならないといふことの2つの理由で、野口に、副島と遠藤さんをつけて、パーティを2つに分けた。

その後、順調に行くものと思われたが、行者岳付近で、東野が、足首をねじってしまった。(後になってであるが、足首のスジが切れたとのこと) 東野の傷は、かなりの痛みを伴い、歩けない程になってしまった。行者岳で、東野を離し、3年2人をつける。3年2人と、東野の個人装を残りのパーティで持ち、歩を進める。必要最低限の個人装を、持たせたため、数回に渡るピストン運動を余儀なくされ、クサリ場の通過などで、思わぬ程の時間をくってしまった。鳥尾山で全員が落ち合い、下るだけの大倉への道を選ぶことにし、3年3名と、東野を離した。

一方、野口のバテはますますひどくなるばかりで、三ノ塔への登りの途中で荷を軽くさせた。他の1年は、休むことが多かったせいか、いたって元気であったため、最後は、締めようということでヤビツまで1Pとした。が、下る時になっても、一向に野口の元気が出ない為、伊東と僕とで、団体装を全部持つことにし、個人装だけをしょわせて、ようやくヤビツに着いた。

このように 目的がトレーニングだったにもかかわらず、数々の失敗が出てしまい今だからって
ないほど失敗の多い山行となってしまった。まず、前日、3年生が、だれてしまったことが、1
年へ与えた影響はかなり大きかったのではないだろうか。また、事故が多かったので、1年が休
む時間が、とても多くなってしまい、そのため、なにか気怠い雰囲気、1年の間に流れてしま
った。結局、トレーニングになったのは、3年と2年だけで、1年生にとっては、楽な山行で終
わってしまったようだ。このことは、我々2年生の1年への指導の仕方にも問題があるように思
われる。1年は、ちょうど今ごろ、山に対して、ある種の疑問を抱くころで、積極的に、山に登
ろうという気になれなかったのではないだろうか。そんな時、春山が頭がある我々が、無理矢理
に彼らを山につれていこうとしたことをも、考え合わせなければならなかったのではないだろう
か。

遠藤 信行 記

ケガ人を下山させる、というあまり経験できないことを経験することができたので、そのこと
について少し書くことにする。

まずケガ人に付きそいをつけて別に下らせる時には、持って行くものをきちんとしておくは
いけない。我々の場合、付きそいの者も、ケガ人の荷物をわけたのを持っていたため負担が大きか
った。又、ケガ人が歩けない時に背負って下ることは、非常にむずかしいことだ。鳥尾小屋の人
の話によると、背負子にのせて、ザイルなどで後から支えるのが一般的な方法だという。我々の
経験からもケガ人が出た時に背負子があるを、非常に便利だと思う。

広瀬 記

会 員 名 簿

◎ 3年部員(26期)

遠 藤 彰	182	調布市深大寺町677	0424-83-1365
鐘 江 和 美	168	杉並区浜田山2-7-8	302-5884
角 田 肇	167	杉並区善福寺3-14-10	390-5065
戸 倉 滋	167	杉並区久我山4-41-15	332-3401
中 尾 伸 二	167	杉並区上荻3-21-2	399-5830
広 瀬 俊 介	180	武蔵野市吉祥寺南町3-12-5	0422-43-5679
米 倉 幸 嗣	168	杉並区宮前4-5-3	333-8766
大和田 洋 子	180	武蔵野市境南町4-16-3 武蔵野ハイム408	0422-32-1688

◎ 2年部員(27期)

伊 東 顕		埼玉県所沢市北野718-55	0429-48-8658
遠 藤 信 行	151	渋谷区笹塚3-4-2-407	377-2067
副 島 健	176	練馬区豊玉南3-23	992-1684
東 野 俊 治	164	中野区本町3-15-18	372-5287

◎ 1年部員(28期)

青 谷 知 己	176	練馬区練馬2-31-7	992-6393
小 玉 剛	180	武蔵野市吉祥寺北町1-20-3	0422-22-2664
世 利 孝 也	177	練馬区北大泉町472	924-0546
松 本 蕃 郎	164	中野区中央5-33 日本生命中野荘C-11	381-1692

◎ 22期卒業生

在 間 直 樹	181	三鷹市牟礼三鷹台団地25-405	0422-45-8511
田 口 真 啓	176	練馬区	953-1254
永 井 浩 之	167	杉並区天沼3-41-2	399-3318
依 田 桂 子	214	川崎市多摩区生田6659-49	044-96-2561
吉 沢 美 波	167	杉並区天沼2-9-4	391-1107

◎ 23期卒業生

荒 木 仁 夫	176	練馬区田柄2-14-12	930-5206
田 原 宏一郎		世田谷区多摩川奥沢町3-98	701-3546
西 井 和 彦	167	杉並区善福寺2-1-2	399-4129
吉 田 真 也		町田市成瀬3377-59	0426-23-6131
嶋 田 桂 子	165	中野区新井2-30-7	386-2552
東 郷 頼 子	164	中野区上高田5-25-7	386-7538

◎ 24期卒業生

石 川 泰 毅	166	杉並区高円寺北4-8-7	337-7335
倉 重 篤 郎	168	杉並区高井戸東3-6-9	334-2825
松 田 重 明	177	練馬区上石神井1-39-2	920-5413
風 巻 恵美子	164	中野区弥生町2-16-12	372-3783
広 兼 洋 子	165	中野区丸山2-9-2	330-1005
渡 辺 容 子	167	杉並区久我山3-10-36	334-3824

◎ 25期卒業生

久 米 祐一郎	167	杉並区本天沼2-47-3	390-0651
鈴 木 健 策	176	練馬区中村北2-4-三井東庄アパート	045-571-5765 990-6747
森 下 道 夫	177	練馬区下石神井1-84	997-1056
住 山 恵美子	167	杉並区南荻窪4-3-15	333-9821
内 藤 絹 恵	165	中野区江古田3-2-17	386-2952
山 田 清 美	153	目黒区東山町2-13-18	713-2549
山 成 久美子	168	杉並区宮前2-17-12 三井鉾山アパート1-12	333-4853

西 朋 会 員 名 簿

◎ 特別会員

都 築 修 一	390	長野県松本市女鳥羽町2-8-6	(02634-22)4709
(故)鳥 山 榛 名			
中 村 淳	155	世田谷区代沢2-25-20 (西高S18~46)	(411)1974
岩 井 富士雄	111	台東区蔵前4-14-14	(861)3175
布 施 千恵子	176	千葉県稲毛町2-4 (西高S26~28)現在 都立練馬高校	
篠 崎 武	190-01	西多摩郡日の出村大久野1718 (西高S25~現在)	(0425-97)0706
石 井 学	167	杉並区善福寺3-10-19 (西高S21~43)現在 共立女子大	(390)3937

◎ 普通会員

安 藤 英 弥	1	190-02 多摩市桜ヶ丘1-42-3 富士重工	
林 春 彦	2	663 西宮市瓦林町23-13甲林ビル303号 日本鋼管	(0798-67)8534
南 波 貞 敏	2	185 国分寺市南町2-3-26 大林組横浜支店	(0423-21)2361 (045-201)4131
長 崎 正 躬	4	241 横浜市旭区左近山団地1-4-304 NHK報道局外信部	(045-382)5088
田 中 将 利	4	167 杉並区西荻北2-11-13西荻窪 田中金属KK マンション405	(396)6410
田 中 実	4	180 杉並区阿佐谷南1-3-18 中央電気通信KK	(311)6389 (311)1101
平 沢 勇	4	249 逗子市新宿2-13-6 シーサイド 平沢建築設計事務所 ハイッ101	(0468-73)5410 (270)7788
笹 田 英 次	4	164 中野区中央3-15-4 信 建 工	(363)7631
山 口 雄 弘	4	180 武蔵野市吉祥寺本町2-14-27	
佐 藤 信 治	4	192 八王子市本郷町8-7 大栄商店	(0426-23)5347 (同上)
松 田 朝 夫	4	565 大阪府豊中市新千里西町2-8-4 松下電器 進相コンデンサ事業部	(068-32)5280 (06-862)1121

町田	明	4	167	杉並区下井草4-20-20 テエムデザイン会社	(390)3217 (543)8337
見里	朝規	4			
渡辺	享	4	187	小平市鈴木町1-258-2 医院経営	(0423-42)3517 (同上)
目沢	民雄	4	167	杉並区上荻1-21-25 海城高校	(398)6578 (209)5880
成瀬	泰雄	5	163	文京区西片2-8-7 日本鋼管工事橋梁部	(813)2443 (045-521)2211
加藤	鈴夫	5	191	日野市南平1083 キューピーKK	(0425-91)2149 (300)-1111
鈴木	潤	5	168	杉並区浜田山3-20-2 富士銀行	(312)2791
岩崎	元子	6	168	杉並区高井戸東4-13-29 法務省	(333)9751 (261)8581内303
桑田	敏子 (旧姓 亀山)	6	246	横浜市瀬谷区二ツ橋町475	(045-36)5336
稲田	弘美 (旧姓 伊藤)	6	351	埼玉県朝霞市膝折433	(0484-62)2605
飯塚	康史	6	190	在米、73年6月に帰国予定 日本IBM KK技術企画部	(0425-36)7866
岩波	康之	6	124	葛飾区堀切4-2-2 岩波ローラー	
米野	弘躬	6	190	立川市富士見町6-180富士見町住宅 20-503 K. K 陽成社	(0425-25)8643 (269)4611
小田	尚於	6	181	三鷹市下連雀4-6-30 三井建設	(0422-47)4849 (863)3111内2027
林	武志	6	180	武蔵野市吉祥寺東町1-11-7 三星産業K. K.	(0422-22)4338 (292)1961
川口	和雄	6	215	川崎市百合ヶ丘1-9-7 伊勢丹デパート	(044-96)0162 (352)1111内3502
松田	稔	9	182	調布市柴崎2-13-3つつじヶ丘ハイム B-606	(0424-86)5787
黒沢	隆	10	251	藤沢市藤ヶ岡1-4-10-204. 日本鋼管輸出部	(0466-24)2165 (212)7111
橋本	鋼太郎	11	770	徳島県徳島市南田宮1-4-30 建設省 建設省宿舍	
今井	義治	11	227	横浜市緑区桜台3 三菱化成桜台アパート 三菱化成企画 A501	(045-983)2033 (283)6786

田中康弘	11	184	小金井市本町5-22-18 住友商事白油課 本町コーポラス502	(0423-83)1576 (217)7204
沢野徹	11	211	川崎市中原区上小田中1213-4 専大大学院 富士見荘13-103	(044-78)3160 (044-91)7131
関谷興雄	11	180	武蔵野市境南町1-12-15 和光交易	(0422-31)7774 (552)8256
小川建吾	12	181	三鷹市下連雀2-12-24 三笠方 東大原子核研究所	(0422-47)7394 (0424-61)4131
梶内俊夫	12	165	中野区上鷺宮1-9-17 東工大 伊藤研究室	(990)7658内205 (726)1111内2115
川田秀明	12	114	北区豊島5-4-1-1036	(919)8206
橋本章	12	254	平塚市八幡477 日本ソーダ生物研究所	
野原光	13	213	川崎市高津区宮崎1540 東大農学部	(044-86)9455
板垣乙未生	14	980	仙台市国見3-3-16 東北大学	(022-33)8706
山本省治	14	189	東村山市若葉町2-2270東村山 大成建設アパート158号 大成建設東京支店土木部工務室	(563)6611
小津亮介	14	183	府中市紅葉ヶ丘1-11-42 天野吉原設計事務所	(0423-62)8921
平木桂太	15	167	杉並区南荻窪4-12-16 川崎製鉄人事部	(332)2897 (212)4511
上遠野清	17	869-11	熊本県菊池郡菊陽町大字戸次 〔自宅〕杉並区今川2-4-16 全日空乗員基礎訓練所内	(399)4097 (0962-32)2239
梅原伸二	17	156	世田谷区船橋7-8-1-803 大成建設	(484)5153 (567)1511
宮武義照	18	316	日立市西成沢1-33-1成美寮205号 日立製作所日立工場火力設計部	(0294-21)1111
尾崎純理	18	176	練馬区練馬3-17-1 司馬法律事務所	(991)4279 (591)3421
滝口道生	18	378	群馬県沼田市東原新町1484-14 豊多摩高校	(393)1331
三浦潤	18	592	大阪府高石市綾園4-5-23 安宅産業 安宅高石寮	(0722-61)2006 (06-231)8061
山野裕	19	182	調布市国領7-15-12 花王石鹼	(0424-85)5704 (617)4161内452
岡田徹	19	167	杉並区本天沼3-26-5 第一勧銀上野支店預金係	(396)0912 (832)8231

永井祥一	20	167	杉並区本天沼3-41-2 講談社	(399)3318
羽柴春実	20	168	杉並区下高井戸4-26-23	(304)0032
伊東伸作	21	180-03	東久留米市ひばりヶ丘団地168-206	(0424-64)6515
中村正俊	21	166	杉並区成田西3-10-26	(311)8647
渡辺喜仁	21	166	杉並区阿佐谷北5-9-13	994-2489 (337)2635
佐久間令子	19		練馬区三原台3-5-16	
高木彰子	19		武蔵野市吉祥寺本町4-24-9 大田区東久留米2-16-16 9-1-50/	(0422-22)6688
入戸野まゆみ	21		杉並区高円寺南2-17-15	(312)4920
山田優子	21		武蔵野市西久保1-37-4 朝日タウンズ	(0422-51)2260 (0425-25)4811
依田桂子	22	214	川崎市多摩区生田6659-49 明正交易	(044-96)2561 (552)7871
西井和彦	23	167	杉並区善福寺2-1-2	(399)4129
渡辺容子	24	168	杉並区久我山3-10-36	(334)3824
住山恵美子	25	167	杉並区南荻窪4-3-15	(333)9821
山田清美	25	153	目黒区東山2-13-18 三井アパート1-12	(713)2549

編 集 後 記

- 彷徨20が出てからすでに5年近くの年月が流れてしまった。我々が出さなければ彷徨の火は消えてしまう、という気持ちで3年であることも忘れて編集を続けた結果、3年も終わり近くの2月になって、ようやく印刷にまわすことができた。
- 69年～71年及び女子の記録は、まとめることができなくて1部ぬけているが、このさいまず彷徨を出すことが先決であるということでそのままにした。
- 彷徨製作の目的意識等についてさかんに討論したこともあったが、結局それは今回では生かせなかった。なにしろたまるいっぽうの原稿を前にため息ばかり。諸先輩には申しわけないがとにかく報告だけでもまとめて出すことになった。
- 登山をすること。その目的意識も我々が入部した頃とはずいぶんかわりつつある。いわばストイックなものを目指すものから、できるだけ楽しもうという傾向が強くなってくるようだ。ひたすら苦しかった我々の1年の時と今の1年を比べると相当のギャップを感じる。確かに山は楽しむものだろう。しかし我々は一抔の不安を禁じえないのである。
- 無駄な苦労は極力排すべきだ。だが多くの無駄をしながら我々は成長していくような気がする。3年間の苦労は決して無意味ではなかったという確信を持っている。
- 1・2年のころは半ば惰性で山に登っていたが、入試を目前にひかえてなにも思いきったことのできない今になってみると、山の楽しさがひしひしと感じられる。しかし、思い出すことは楽しかった山行ではなく、苦しかった山行だ。山というのは、その時に楽しいものではなくとも、計画段階や帰ってきてから後に思い出すことも楽しいのではないだろうか。
- 西高ワングル部も年々近代化を計り新しい登山を追求しようとしている。それでも多くの先輩の築きあげた良い意味での伝統、精神的な結びつきは失いたくないものだ。
- 編集の頭初載せるはずであった多くの評論は紙数の関係で省いた。昨年の記念祭でまとめた他校のアンケート等も機会をみて発表されるだろう。
- なにしろ彷徨を続けることだけを念頭においたので非常に不十分なものとなったことについての批判は甘んじて受ける。今回は非常に間があいたがこれからはやはり1年おきくらいには出してもらいたい。

広 瀬 ・ 遠 藤 記

彷徨 第21号

昭和49年7月 日 発行

編集人 遠藤 彰

発行所 西高ワンダーフォーゲル部
杉並区宮前4-21-32